

(再評価)

資料 2 - 2 (1)

河川事業

再評価原案準備書説明資料

いしかり
石狩川総合水系環境整備事業

令和4年度
北海道開発局

目 次

1. 流域の概要	1
2. 江別市かわまちづくりの概要	6
3. 砂川地区かわまちづくりの概要	18
4. 恵庭かわまちづくりの概要	31
5. 石狩川下流幌向地区自然再生の概要	44
6. 美瑛川地区かわまちづくりの概要	54
7. 事業の投資効果	62
8. コスト縮減や代替案立案等の可能性	70
9. 地方公共団体等の意見	72
10. 対応方針(案)	73

1. 流域の概要

1.1 石狩川水系の概要

・石狩川は、その源を大雪山系の石狩岳(標高1,967m)に発し、渓流を集めながら層雲峡の渓谷を流下して上川盆地に至り、旭川市街で牛朱別川、忠別川等を合流し、神居古潭の狭窄部を下って、石狩平野に入り、雨竜川、空知川、幾春別川、夕張川、千歳川、豊平川などの多くの支川を合わせ、石狩市において日本海に注ぐ、流域面積14,330km²(全国2位)、幹川流路延長268km(全国3位)の一級河川です。



項目	諸元	備考
流域面積	14,330km ²	
幹川流路延長	268km	石狩川本川
国管理区間延長	807km	石狩川本川および支川の合計管理延長
流域内市町村	18市 27町 1村	札幌市、旭川市、江別市、千歳市、恵庭市、北広島市、石狩市、夕張市、岩見沢市、美唄市、芦別市、赤平市、三笠市、滝川市、砂川市、歌志内市、深川市、富良野市、当別町、南幌町、奈井江町、上砂川町、由仁町、長沼町、栗山町、月形町、浦臼町、新十津川町、妹背牛町、秩父別町、雨竜町、北竜町、沼田町、幌加内町、上富良野町、中富良野町、南富良野町、愛別町、東神楽町、鷹栖町、当麻町、比布町、上川町、東川町、美瑛町、新篠津村

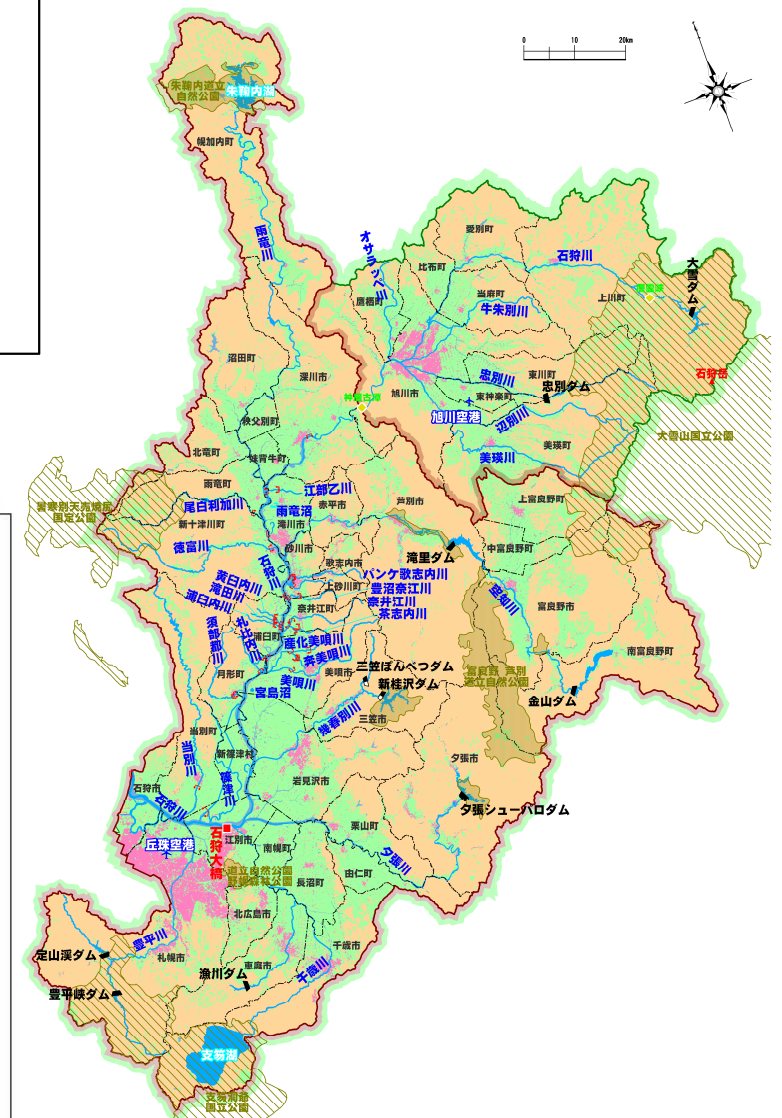


図 石狩川流域図

1. 2 河川環境の現状と課題

○水環境についての現状と課題

茨戸川はこれまで浚渫や下水道の整備等により水質は改善傾向にあるものの、環境基準(BOD3mg/L以下)を達成するまでには至っていません。しかし、札幌市における高度処理対策や浄化用水の導水の実施も進められており、引き続きモニタリングが必要です。

○自然環境についての現状と課題

石狩川では、周辺の土地利用の急速な進展、湿地環境の減少など自然環境の変化が進んでいます。そのため、幌向地区で湿地再生の実施が行われているなど、対策が進められています。引き続き、石狩川の自然環境の保全及び再生のため、地域と協働した実施が必要です。

○河川利用についての現状と課題

本川、豊平川、千歳川、忠別川等の高水敷や旧川では、様々な公園施設等の河川環境整備が進められており、憩いの場や自然とのふれあい、スポーツ、健康づくり及びイベントの場として広く地域住民等に利用されています。引き続き、地域のニーズを踏まえ、地域と協働した実施の展開が必要です。

1. 3 河川整備計画における位置付け

平成19年9月に策定された石狩川水系河川整備計画には、総合水系環境整備事業を推進することが記載されております。

1. 4 整備の方針

○水環境についての方針

- ・良好な水辺空間の創出を目指し、特に水質や流況の改善が必要な箇所において、地域や関係機関との連携を図りつつ、水質や流況の改善に取り組みます。

○自然環境についての方針

- ・石狩川下流自然再生計画に基づき、河道の多様性、湿地環境や樹林環境等の再生を目指し、順応的・段階的に事業を進めます。また、支川についても自然再生計画を策定し、各支川の特성에応じて自然再生を図ります。
- ・魚類等の移動の連続性を妨げている横断工作物については、施設管理者と連携調整して魚類等の移動の連続性を確保します。また、樋門につながる小河川との連続性についても配慮します。

○河川利用についての方針

- ・地域のまちづくりや河川空間の利用状況を踏まえ、景観、歴史、文化など河川が有する地域の魅力を観光などの活性化につなげるために、地方公共団体や地元住民との連携の下で立案された、水辺の整備・利活用計画について地域と協力して推進します。
- ・ユニバーサルデザインの取組を推進します。

1.5 現在又は今後実施すべき事業

石狩川総合水系環境整備事業において実施中(実施済み)の箇所は、以下のとおりです。

箇所名	整備時期	整備内容	箇所毎の評価種別	
江別市かわまちづくり	令和5～14年度	・高水敷整正、側帯 ・管理用通路、階段護岸 等	○新規箇所	再 評 価
砂川地区かわまちづくり	令和元～10年度	・親水護岸、高水敷整正 ・管理用通路、水路工 等	○継続箇所	
恵庭かわまちづくり	令和元～10年度	・親水護岸、管理用通路等		
石狩川下流自然再生(幌向地区)	平成27～令和6年度	・湿地整備等		
美瑛川地区かわまちづくり	平成27～令和元年度	・高水敷整正 ・管理用通路 等		
石狩川下流自然再生(当別地区)	平成13～28年度	・ワンド ・湿地の造成 等	○整備済み箇所	
旭川市街地区かわまちづくり	平成13～28年度	・階段工、管理用道路 ・高水敷整正 等		
茨戸川水環境整備 (茨戸川清流ルネッサンスⅡ事業)	昭和53～平成25年度	・導水施設 ・浚渫 等		
豊平川水辺整備	昭和42～平成17年度	・護岸、高水敷整正 ・管理用通路 等		
漁川水辺整備	平成15～19年度	・高水敷整正、管理用通路 ・坂路、管理用階段 等		
雨竜川水辺の楽校	平成17～19年度	・高水敷整生 ・管理用通路、坂路 等		
漁川ダム貯水池水質保全	平成13～17年度	・河岸保護工、堆砂掘削 ・湖水循環装置 等		

※過去に完了箇所評価済

旭川市街地区かわまちづくり
(平成13～28年度)

- ・階段工
- ・管理用道路
- ・高水敷整正 等

雨竜川水辺の楽校
(平成17～19年度)

- ・高水敷整正
- ・管理用通路、坂路 等

石狩川下流自然再生(当別地区)
(平成13～28年度)

- ・ワンド
- ・湿地の造成 等

茨戸川水環境整備
(茨戸川清流ルネッサンスⅡ事業)
(昭和53～平成25年度)

- ・導水施設
- ・浚渫 等

豊平川水辺整備
(昭和42～平成17年度)

- ・護岸、高水敷整正
- ・管理用通路 等

漁川水辺整備
(平成15～19年度)

- ・高水敷整正、管理用通路
- ・坂路、管理用階段 等

漁川ダム貯水池水質保全
(平成13～17年度)

- ・河岸保護工、堆砂掘削
- ・湖水循環装置 等

砂川地区かわまちづくり
(令和元～10年度)

- ・親水護岸、高水敷整正
- ・管理用通路、水路工 等

美瑛川地区かわまちづくり
(平成27～令和元年度)

- ・高水敷整正
- ・管理用通路 等

石狩川下流自然再生(幌向地区)
(平成27～令和6年度)

- ・湿地整備 等

江別市かわまちづくり
(令和5～14年度)

- ・高水敷整正、側帯
- ・管理用通路、階段護岸 等

恵庭かわまちづくり
(令和元～10年度)

- ・親水護岸、管理用通路 等

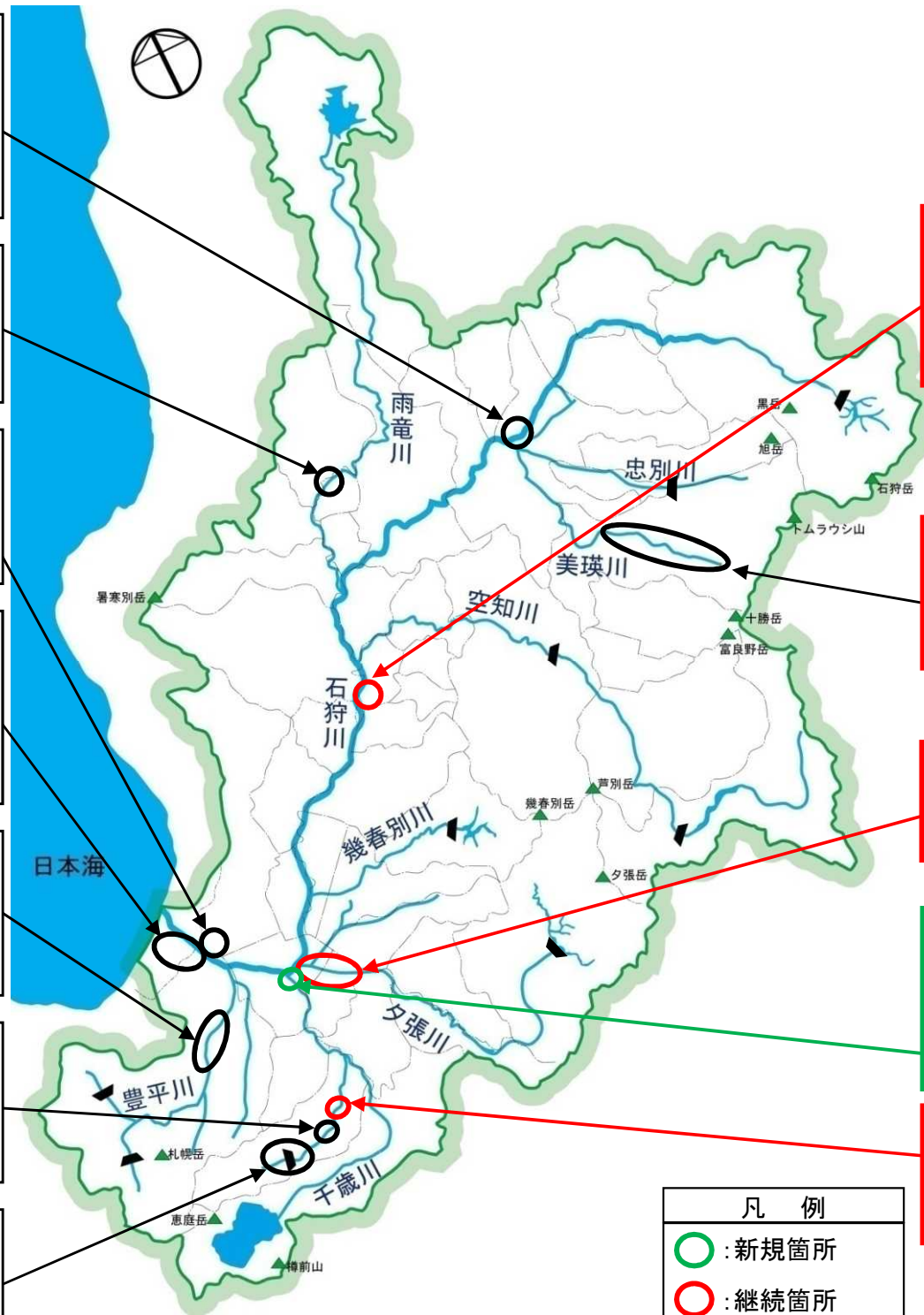


図 実施中(実施済)事業の位置図

凡 例

- : 新規箇所
- : 継続箇所
- : 整備済み箇所

2. 江別市かわまちづくりの概要

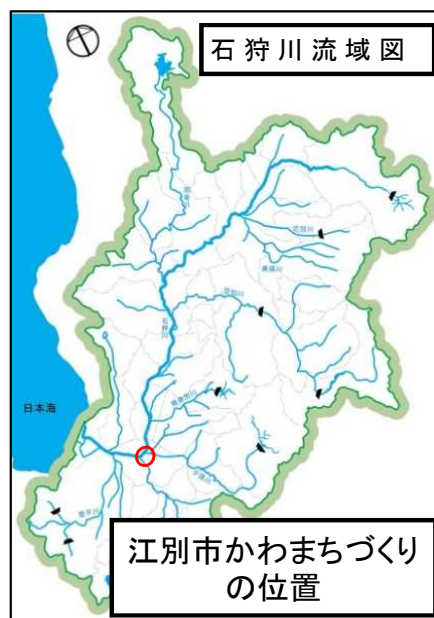
2.1 事業を巡る社会経済情勢の変化

2.1.1 河川環境を取り巻く状況

(1) 事業実施地域の概要

江別市は、石狩平野の中央に位置し、全般的に平坦な地形で豊かな自然環境に恵まれ、道央圏で札幌市に次ぐ規模の都市です。

江別市かわまちづくり整備箇所である江別市内の千歳川合流地点周辺は、明治11年の屯田兵の入植以降、千歳川に面した江別港と月形町を往来する外輪船により石狩川の舟運の中心として栄え、当時の隆盛を物語る外輪船(旧岡田倉庫)等の歴史的建造物が残っています。



主要流入河川：石狩川
沿河市町村人口（江別市）：約12万人
※出典：住民基本台帳（令和3年1月1日現在）



図 江別市かわまちづくり対象地域及び周辺状況

(2) 地域の現状と課題

新規箇所

江別市では、「えべつ未来づくりビジョン(第6次江別市総合計画)」に基づき、地域資源を活かし江別観光の魅力をさらに高めるとともに、商店街の活性化等を推進し、観光による産業の振興に努めています。また、「江別市都市計画マスタープラン2014」における江別地域のまちづくり構想に基づき、江別駅周辺の歴史性や界隈性、河川環境等の特性を活かした地域の魅力向上を目指して、地区核にふさわしい土地利用を市民協働で検討することや、千歳川の総合的な治水事業を推進することとされています。そのため、治水施設の整備とまちづくりの連携が必要となっています。



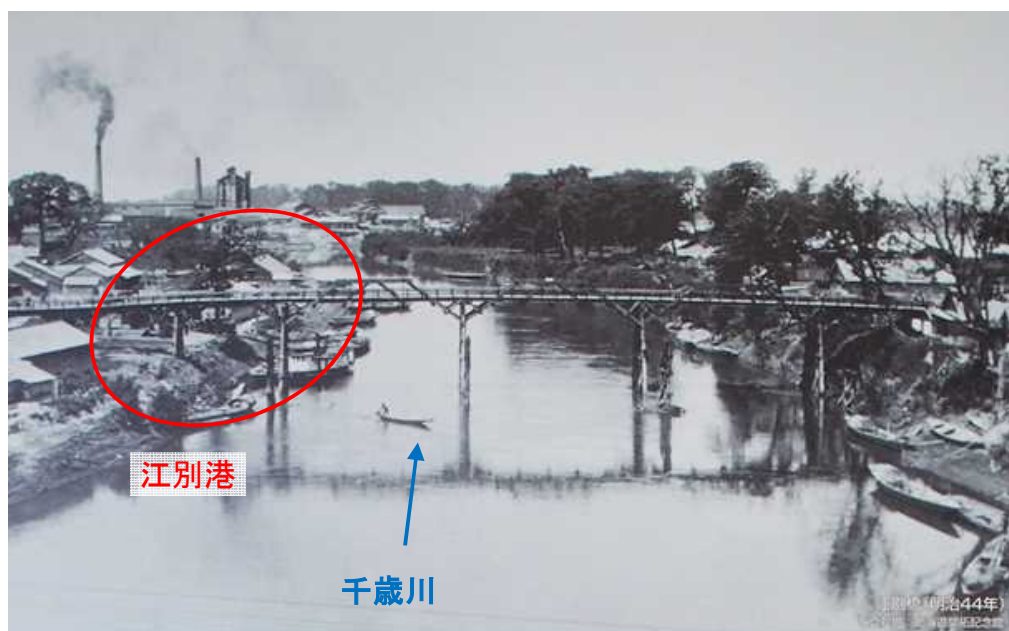
図「江別市都市計画マスタープラン2014」におけるまちづくり構想

(3) 事業箇所周辺地域の現状と課題

石狩川と千歳川が合流する事業箇所周辺地域には、明治時代に始まった北海道の開拓において主要な交通手段だった鉄道と舟運の結節点である江別港がかつてあり、外輪船(旧岡田倉庫)などの歴史的建造物が残っている地区です。

しかし、江別市街地築堤整備に伴い移設が必要となり、江別市では外輪船(旧岡田倉庫)の令和5年度中の移設を予定しています。

そのため、堤防整備に併せて、外輪船(旧岡田倉庫)の歴史的景観を活かしつつ水辺とまちを一体的に整備し、交流人口の増加、歴史的経緯を踏まえた水辺の賑わいの創出が必要です。



明治44年の江別橋周辺の様子



外輪船（旧岡田倉庫）

2. 1. 2 河川の利用状況

新規箇所

当該整備箇所では、春には「こいのぼりフェスティバル」、夏には「えべつ花火」や「石狩川リバーセーリング」等、多くのイベントが開催されています。また、過去にNPO主体で開催された「ミズベのロングマーケット」では、と千歳川沿いで多くの市民がコンサート・雑貨販売等を楽しんでいます。

整備箇所に隣接する江別河川防災ステーションでは、江別の観光の紹介及び物産の販売を行っており、年間約7.7万人(令和3年度)が来場しています。

他にも、市民や地元のNPO等と河川管理者が連携しながら、市民参加による清掃活動等の維持管理や小学生を対象とした水生生物の観察会等の環境教育に取り組んでいます。



こいのぼりフェスティバル



えべつ花火



秋の味覚まつり
(江別河川防災ステーション)



石狩川リバーセーリング



ミズベのロングマーケット

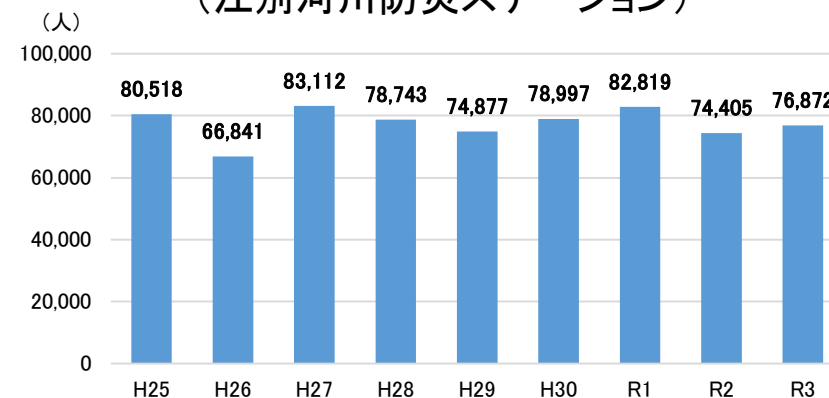


図 江別防災ステーションの入館者数
(H25～)

江別市の令和4年1月1日現在の人口は約12万人であり、近年、大きな変化はありません。

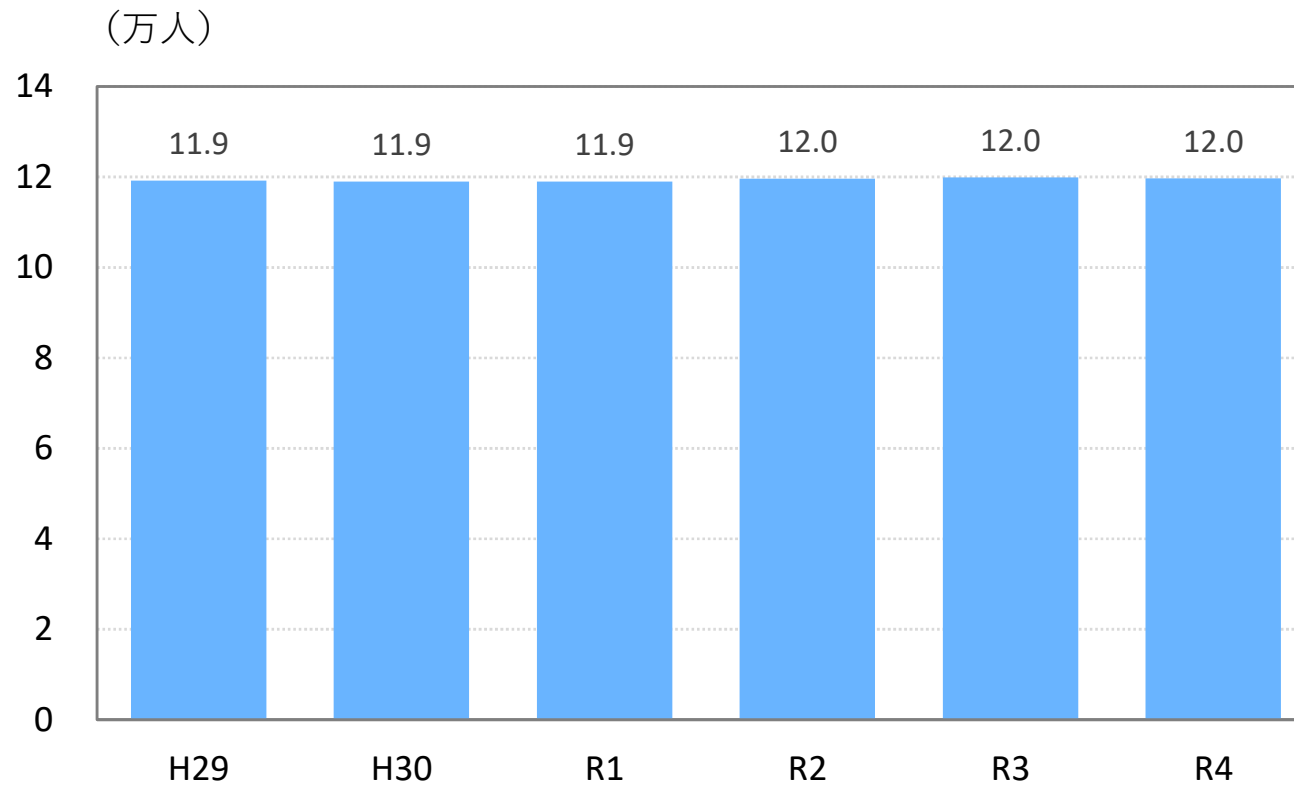


図 江別市における人口の推移

資料：住民基本台帳(各年1月1日)

令和2年11月、江別市・学識経験者・地元関係者による「江別市かわまちづくり協議会」が設立され、外輪船周辺の河川空間とまち空間が融合した良好な空間形成を目指す取組の協議が進められました。

また、令和3年1月からは、江別市と河川管理者、地域住民による「江別市かわまちづくり勉強会」を開催し、より具体的な事業計画の策定と実践に向けた議論・検討等を行っています。

今後、河川占有許可準則第22条(都市・再生等利用区域の指定)に基づく営利活動を行う民間事業者の参入が見込まれており、事業を遂行・運営する実行組織の発足を目指します。

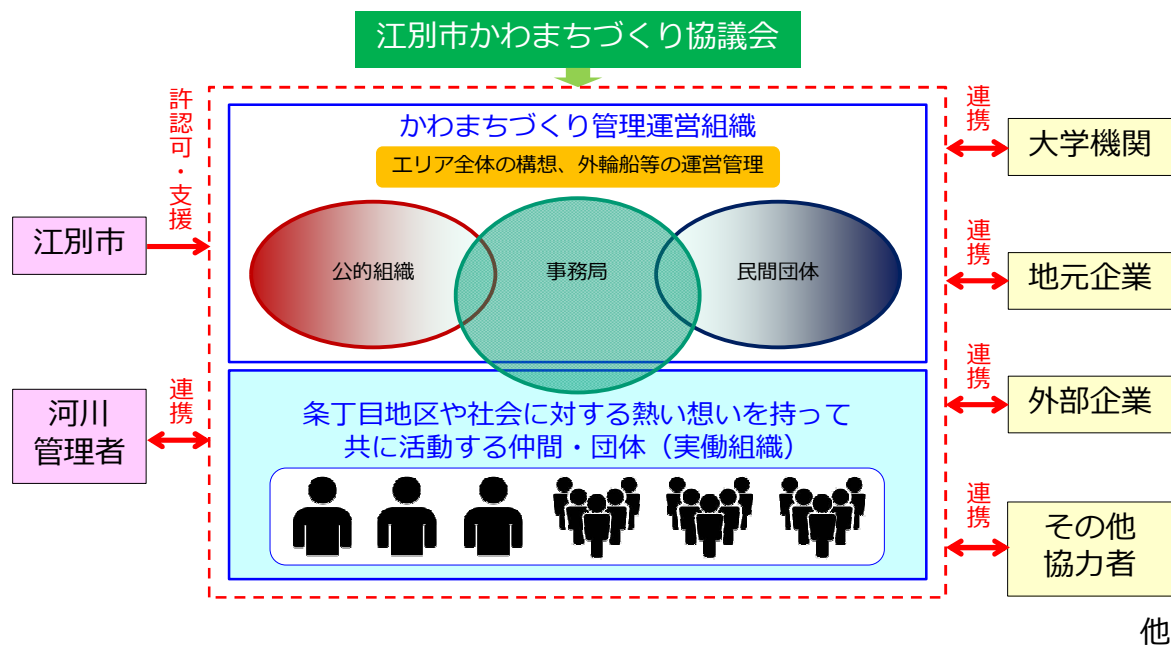


図 江別市かわまちづくり管理・運営組織の実施体制(案)

江別市かわまちづくり勉強会

2. 1. 5 関連事業との整合

江別市では、「江別市まち・ひと・しごと創生総合戦略」(平成27年策定)に基づき、観光振興による交流人口の増加と経済活性化を目指しています。具体的な施策として、石狩川や歴史的建造物などの地域資源を観光振興への有効活用とすること等を掲げています。

令和元年8月に設立された「さっぽろ連携中枢都市圏観光協議会」では、札幌市及び近隣の11市町村が連携し、観光客を増加させ、圏域全体の観光消費を増大させるために、戦略的な共同プロモーション事業等を実施しており、当該事業箇所を拠点として活用することを検討しています。

上記の事業と連携することで、賑わいのある水辺空間の利活用の推進を進めます。

【政策の企画・実行に当たっての基本方針】

5 地域資源や地域特性を生かした取り組み

江別市は、大消費地札幌市に隣接し、交通アクセスの優位性があります。

また、市内には4つの大学や様々な研究機関が立地しており、知的資源を生かした産学官連携や学生の力を生かしたまちづくりに積極的に取り組んでいます。

さらに、石狩川や野幌森林公園などの自然環境や豊かな農畜産物にも恵まれています。

こうした地域資源や立地性の強みを生かして、江別市ならではの「まち・ひと・しごと創生」の施策を進めてまいります。

【地域資源の活用による観光の振興】

石狩川や原始林、地場産品、食と農、歴史的建造物などの地域資源を観光資源としてさらなる有効活用を図るとともに、新たな観光拠点を整備するなど、大都市である札幌市に隣接している地の利を最大限に生かした江別市ならではの観光を推進します。

具体的な事業	重要業績評価指標(KPI)
地域資源の観光への有効活用 ・豊かな自然や既存の施設の利活用、食と農の観光化や、市民や企業等による観光資源の発掘・創出・魅力向上を支援することにより、地域資源を生かした観光を推進。	観光案内所来所数/ 130,000人(H31年度) ※5年間累計
観光資源のパッケージ化 ・顧客の目的やニーズに合った様々な地域資源を組み合わせ、江別市ならではの観光資源のパッケージ化や観光ルート化による相乗効果で、観光の魅力を高めるとともに地域振興も図る。	観光協会会員数/ 180会員(H26年度) →200会員(H31年度)

「さっぽろ連携中枢都市圏」とは、より魅力的なまちづくりを目指して、札幌市と近隣11市町村によって形成。それぞれの「まち」の特性を活かし、綿密な連携と役割分担のもと、暮らしや経済に役立つ様々なとりくみを実施。

【戦略的な観光施策】

連携事業名	共同プロモーションや観光資源の活用等の推進
事業概要	圏域における観光客を増加させ、圏域全体の観光消費を増大させるため、圏域内市町村で構成する協議会において、観光振興に関する取組を企画・立案し、ツーリズム連携等の連略的な共同プロモーション事業等を実施する。
連携市町村	全市町村(=札幌市、小樽市、岩見沢市、江別市、千歳市、恵庭市、北広島市、石狩市、当別町、新篠津村、南幌町、長沼町)
具体的項目	共同プロモーション事業等の実施
関連SDGs	<div>8 働きがいも経済成長も</div> <div>9 産業と技術革新の基盤をつくろう</div>

(1) 事業の河川整備計画等の位置付け

当該整備については、「石狩川水系千歳川河川整備計画」(平成17年4月策定、平成27年3月変更)において、「河川空間の利用に関する目標」として、『河川空間は、人々が川や水辺とふれあい親しめる場として利用されるよう関係機関と連携し、その整備に努める。』と位置付けられています。

(2) 事業の経緯

江別市・学識経験者・地元関係者で構成される「江別市かわまちづくり協議会」において事業計画の策定を行い、「かわまちづくり支援制度」を活用した「江別市かわまちづくり」として国土交通省に申請し、令和4年8月9日に登録されました。

(3) 事業の目的

江別市かわまちづくりは、外輪船(旧岡田倉庫群)の歴史的景観を活かしつつ、高水敷整正、側帯、管理用通路等の水辺整備を行うことで、市民に日常的に水辺を利用してもらい、水辺とまちをつなぐ人の流れや民間活力を取り入れ、河川空間の賑わいを創出することを目指します。

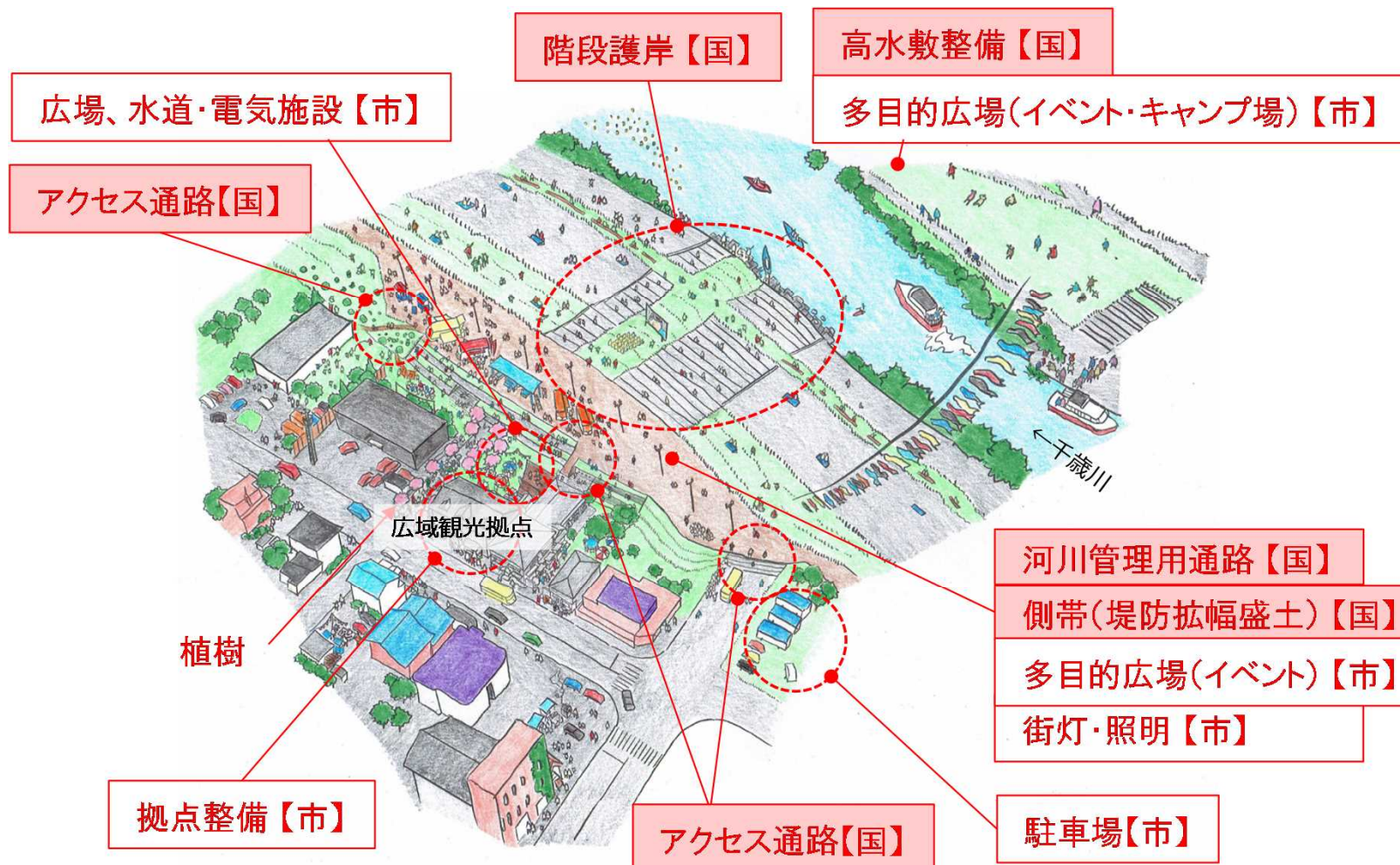


江別市かわまちづくり整備箇所

(4) 主な整備の内容

国は、石狩川総合水系環境整備事業でかわまちづくりの高水敷整正、側帯、管理用通路、アクセス通路、階段護岸整備を行う。

江別市は、拠点整備、広場、水道・電気施設、多目的広場、街灯・照明、駐車場の整備を行う。



多目的広場活用イメージ



階段護岸整備イメージ



側帯活用のイメージ

(5) 期待される効果

外輪船（旧岡田倉庫）は、江別市の芸術・文化の発信を目的としたイベントスペースとして活用されており、最近では海外アーティストの展示会やプロジェクションマッピング等が行われています。

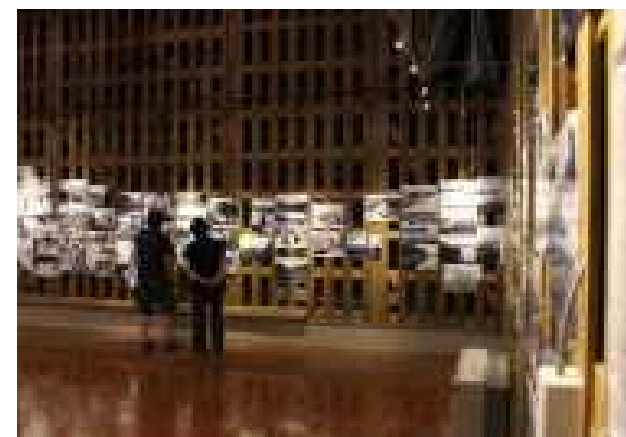
近年、周辺では住民の転入や保育施設の開設等が見られはじめており、整備により日常的な散策や水辺利用が見込まれるとともに、冬場はファットバイク・クロスカントリースキーコースを設定することで、周辺施設と一体となった水辺空間が創出され、地域の魅力向上と活性化に寄与します。また、同時に江別市の観光誘客を推進することで、歴史的経緯を踏まえた水辺の賑わいの創出、水辺を活用したイベントによる市内外からの広域的な観光誘客、交流人口の増加が期待されます。



こいのぼりフェスティバル
(5月上旬)



エキテラ2022 江別かわまち
(アイスキャンドル)



外輪船アート展

2.3 事業の進捗の見込み

2.3.1 今後の事業スケジュール

江別市かわまちづくりについては、令和5年度に事業着手し、令和14年度に完了する予定です。
直轄事業費は約2.6億円※を予定しています。

※その他費用として、自治体の事業費約3.4億円を含め、総事業費は約5.9億円を予定しています。

令和5年度以降の事業

- ・国：「水辺整備(高水敷整正、側帯、管理用通路、アクセス通路、階段護岸)」等
- ・江別市：「拠点整備(広場、水道・電気施設、多目的広場、街灯・照明、駐車場整備)」

上記事業については引き続き、江別市をはじめ地域の方々や関係機関と連携・調整を図りながら計画的に実施します。

表 事業の進捗状況

実施者	工 種	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R13	R14
河川管理者	水辺整備										
	モニタリング						■	■	■	■	■
江別市	拠点整備										
	かわまちづくり協 議会・勉強会										

■ 工事等期間 ■ ■ ■ モニタリング期間

3. 砂川地区かわまちづくりの概要

再評価

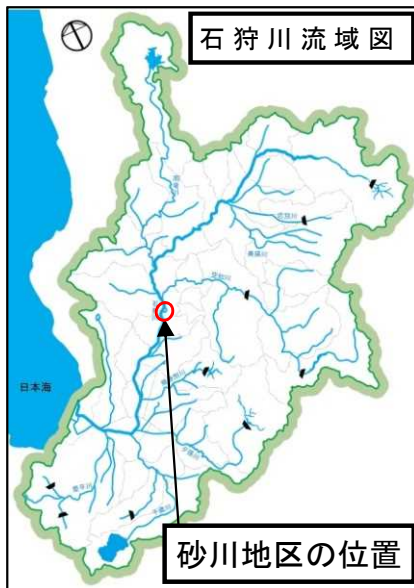
3. 1 事業を巡る社会経済情勢の変化

3. 1. 1 河川環境を取り巻く状況

(1) 事業実施地域の概要

砂川市は、豊かな自然に恵まれ、交通アクセスも充実しており、高速道路に直結する「道立公園 北海道こどもの国」、「砂川ハイウェイオアシス館」などの観光レクリエーション施設が立地し、市内外から多くの人々が訪れる広域的なレクリエーション拠点となっています。

事業箇所である砂川遊水地は、洪水時には石狩川の洪水調節の役割を担っており、平常時は、サイクリング、ヨット、釣りなど親水レクリエーションの場となっています。

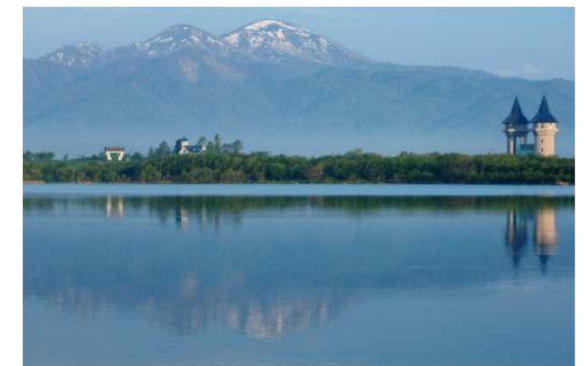


主要流入河川：石狩川
沿江市町村人口：約1.6万人
砂川市

出典：住民基本台帳
(令和4年1月1日現在)



図 砂川地区かわまちづくり対象地域及び周辺状況



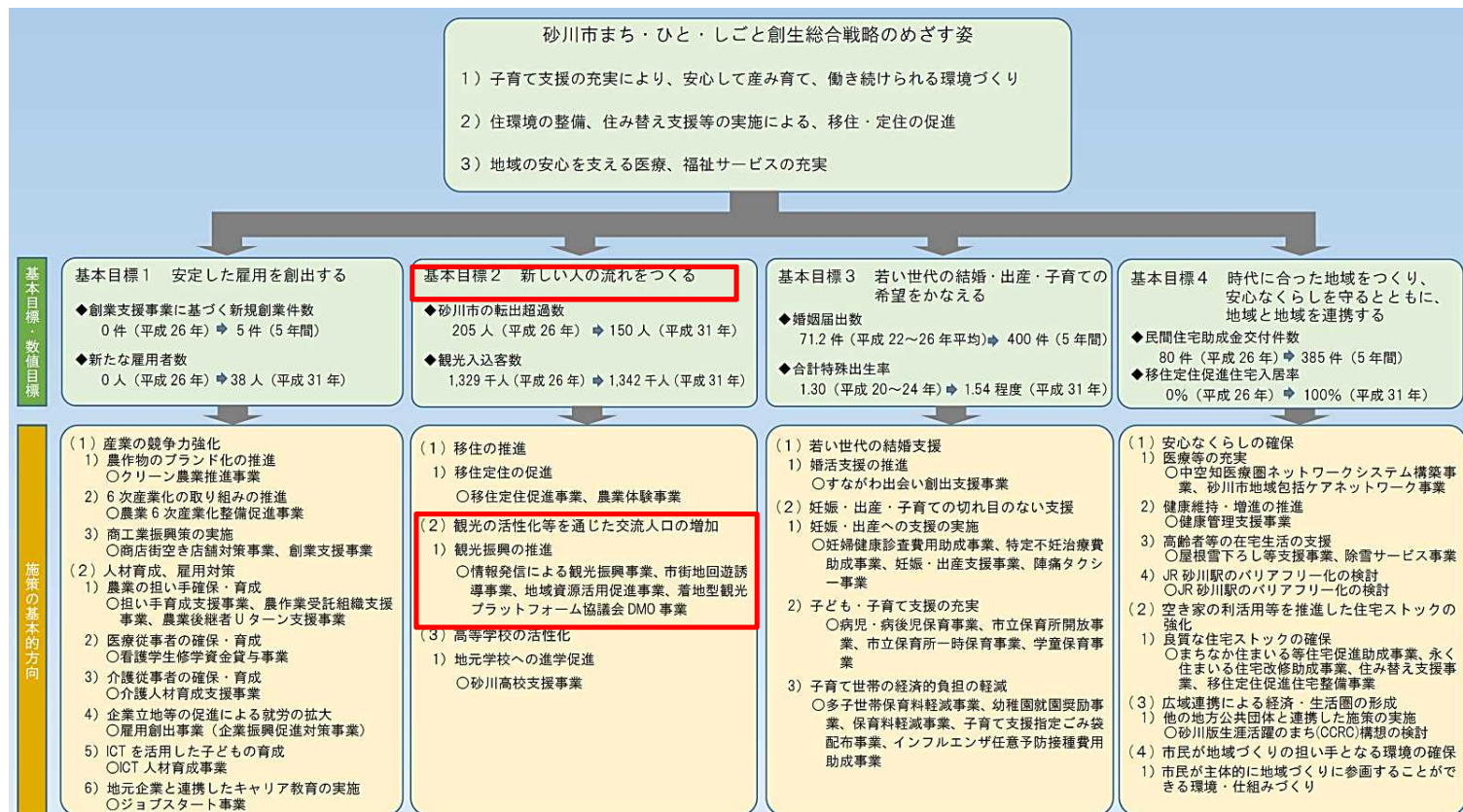
砂川遊水地

※「国土地理院地図」
(国土地理院Webサイト) を加工して作成

(2) 地域の現状と課題

砂川市では、直面する人口減少と地域経済の縮小を克服することが課題となっており、「砂川市まち・ひと・しごと創生総合戦略」(平成28年1月策定、平成29年3月計画変更)に基づき、「新しい人の流れをつくる」などの4つの基本目標を設定し、「観光の活性化を通じた交流人口の増加」等の具体的な取組を進めています。

砂川オアシスパークは砂川市の「緑の基本計画」(平成24年3月策定)において、中空知圏域における広域レクリエーションの拠点と位置づけられており、その機能の充実を図ることとされています。また、砂川市では中小企業地域資源活用促進法による「ふるさと名物」に『すながわスイーツ』を位置づけており、砂川のお菓子の魅力と様々な地域資源の活用でまちのイメージアップと交流人口の創出を図る計画を策定し、平成29年5月に地域再生計画として認定されています。



出典：「砂川市まち・ひと・しごと創生総合戦略」概要版（平成28年1月策定、平成29年3月計画変更）

※かわまちづくり計画登録申請（平成30年1月）時点

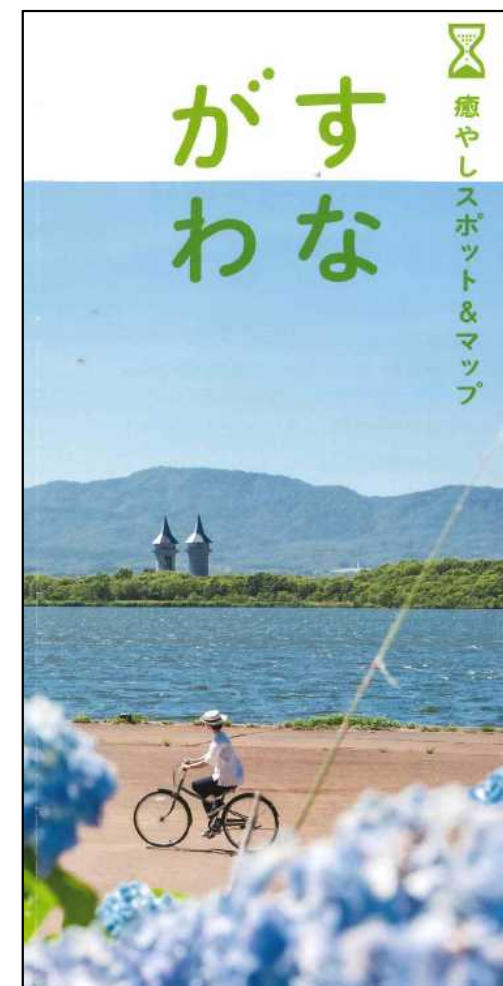
(3) 砂川地区の課題

平成27年8月、道央自動車道砂川SAにスマートインターチェンジが開通しましたが、砂川市内へ観光客を勧誘する観光資源をどう作っていくかが課題となっていました。

一方、石狩川の洪水調節のために平成7年に完成した砂川遊水地については、平常時は水上アクティビティや釣り、散歩等を楽しむオアシスパークとして利用、また、美しい景観、広大な水辺空間等というここにしかない魅力を有しています。

そこで、地元関係者・砂川市・河川管理者からなる「オアシスパークからゆめまちづくり協議会設立準備会」が平成28年1月に発足し、砂川オアシスパークが観光情報の拠点、休憩ポイント等となり、砂川市内へ回遊する人が増えることによって地域振興を図るため、利活用プランについて協議・検討が進められてきました。

平成30年1月、より具体的な事業計画の策定と実践のために協議会が設立され、市民及び関係者の期待も高まっています。



写真：すながわ癒やしスポット
& マップの表紙(砂川遊水地)

3. 1. 2 河川等の利用状況

「砂川遊水地」は、「砂川オアシスパーク」として親しまれ、サイクリングやヨット、水上バイク、釣りなどに利用されるとともに、「石狩川下覧櫓^{くだらんかい}川下り大会」、「ラブ・リバー砂川夏まつり」などのイベントが開催される水辺のレクリエーションエリアとなっています。



写真 遊水地



写真 サイクリング



写真 石狩川下覧櫓



写真 ウォーターヒルズスクエア



写真 ワカサギ釣り



写真 砂川夏まつり 砂川納涼花火大会

3. 1. 3 地域開発の状況

再評価

砂川市の令和4年1月1日現在の人口は約1.6万人であり、近年、若干の減少傾向にあります。

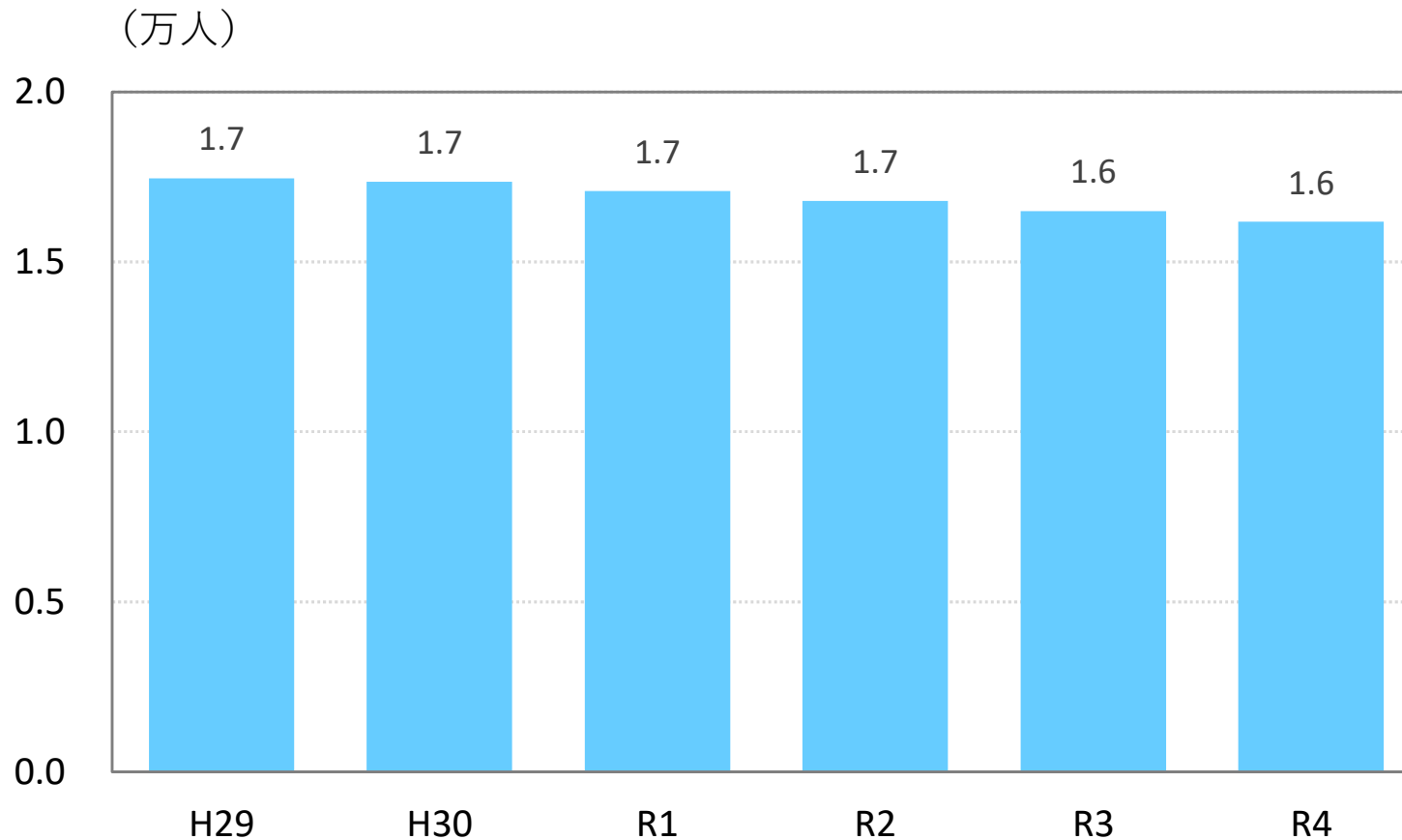


図 砂川市における人口の推移

資料：住民基本台帳(各年1月1日)

3. 1. 4 地域の協力体制

砂川遊水地では、従来から市民団体がごみ拾いを行ったり、あじさいの植栽を行うなど、河川愛護活動が続けられています。

流域自治体等で構成される地元期成会「北海道河川環境整備促進協議会」から、「河川等が連続した身近な公共空間・河川水面を地域固有の河川の特性を生かして利活用する、個性ある“まちづくり”に対する施策」及び「地域の特徴・魅力を高める水辺の整備」の積極的な推進が要望されています。

平成28年1月に国、砂川市、NPO、地元住民などで構成する「オアシスパークからゆめまちづくり協議会 設立準備会」が設立され、かわまちづくりに関するワークショップで幅広い議論が行われるとともに、平成30年1月には「オアシスパークからゆめまちづくり協議会」が設立され、かわまちづくりを推進する環境が整っています。

また、平成29年8月及び11月に、先例地の視察やウォーターヒルズスクエアを活用した物販、フリーマーケットなど新たな利活用を目指す社会実験の取組が実施され、これらの社会実験の結果を踏まえ、令和2年11月に都市・地域再生等利用区域の指定が決定しました。



写真 砂川遊水地での清掃活動（平成29年5月、事務局：石狩川下覧櫓）



写真 オアシスパークからゆめまちづくり協議会設立準備会



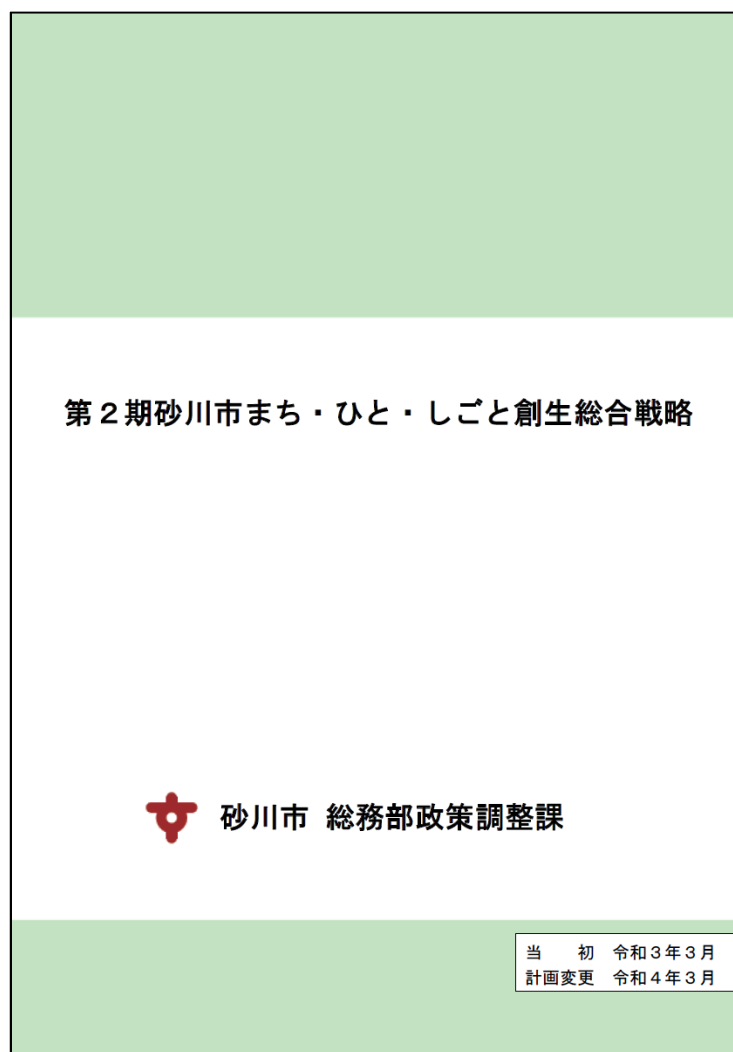
写真 ウォーターヒルズスクエアの夜間解放・物販の状況（平成29年8月社会実験）



写真 ウォーターヒルズスクエアでのフリーマーケットの状況（平成29年11月社会実験）

3. 1. 5 関連事業との整合

「第2期砂川市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の基本目標のうち「新しい人の流れをつくる」を実現するために、行政、地域及び関係団体が連携して砂川オアシスパークの更なる利活用を通してまちの活性化を図ります。



出典：「第2期砂川市まち・ひと・しごと創生総合戦略」（令和3年3月策定、令和4年3月計画変更）

3. 2 事業概要及び進捗状況

(1) 事業の河川整備計画等の位置付け

当該整備については、「石狩川(下流)河川整備計画」(平成19年9月策定)において、『生活の基盤や歴史、文化、風土を形成してきた石狩川の恵みを活かしつつ、自然とのふれあい、釣りやスポーツ、船の活用などの河川利用、環境学習の場等としての整備・保全を図る。その際、高齢者をはじめとして誰もが安心して親しめるようにするとともに、沿川の自治体が立案する地域計画等との連携・調整を図り、河川利用に関する多様なニーズを十分反映した河川整備を推進する。』と位置付けられています。

(2) 事業の経緯

平成30年1月に国、砂川市、NPO、地元住民などで構成する「オアシスパークからゆめまちづくり協議会」が設立され、具体的な事業計画の策定と実践のための体制がつくられ、「かわまちづくり支援制度」を活用した「砂川地区かわまちづくり」として国土交通省に申請し、平成30年3月26日に登録されました。その後、新たな利活用を目指す社会実験の取組が実施され令和2年11月に都市・地域再生等利用区域の指定が決定しました。

(3) 事業の目的

本事業は、自治体、協議会及び国が連携し、「砂川遊水地」を、より利便性及び安全性の高い親水レクリエーション空間として整備するものです。

国道12号沿線の砂川市街地中心部の商業施設等から至近の距離にある「砂川遊水地」について、「すながわスイートロード」など地域活性化の取組と連携した利活用を推進し、交流人口の増加、地域活性化等を目指しています。



写真 砂川遊水地の全景

(4) 主な整備の内容

自治体、協議会、国が連携して、多目的広場の基盤整備や砂川遊水地の水辺整備などを行います。

砂川市・協議会

・公園整備
・看板整備
等

連携

国

・高水敷整正
・親水護岸
・管理用通路
・水路工
等

等

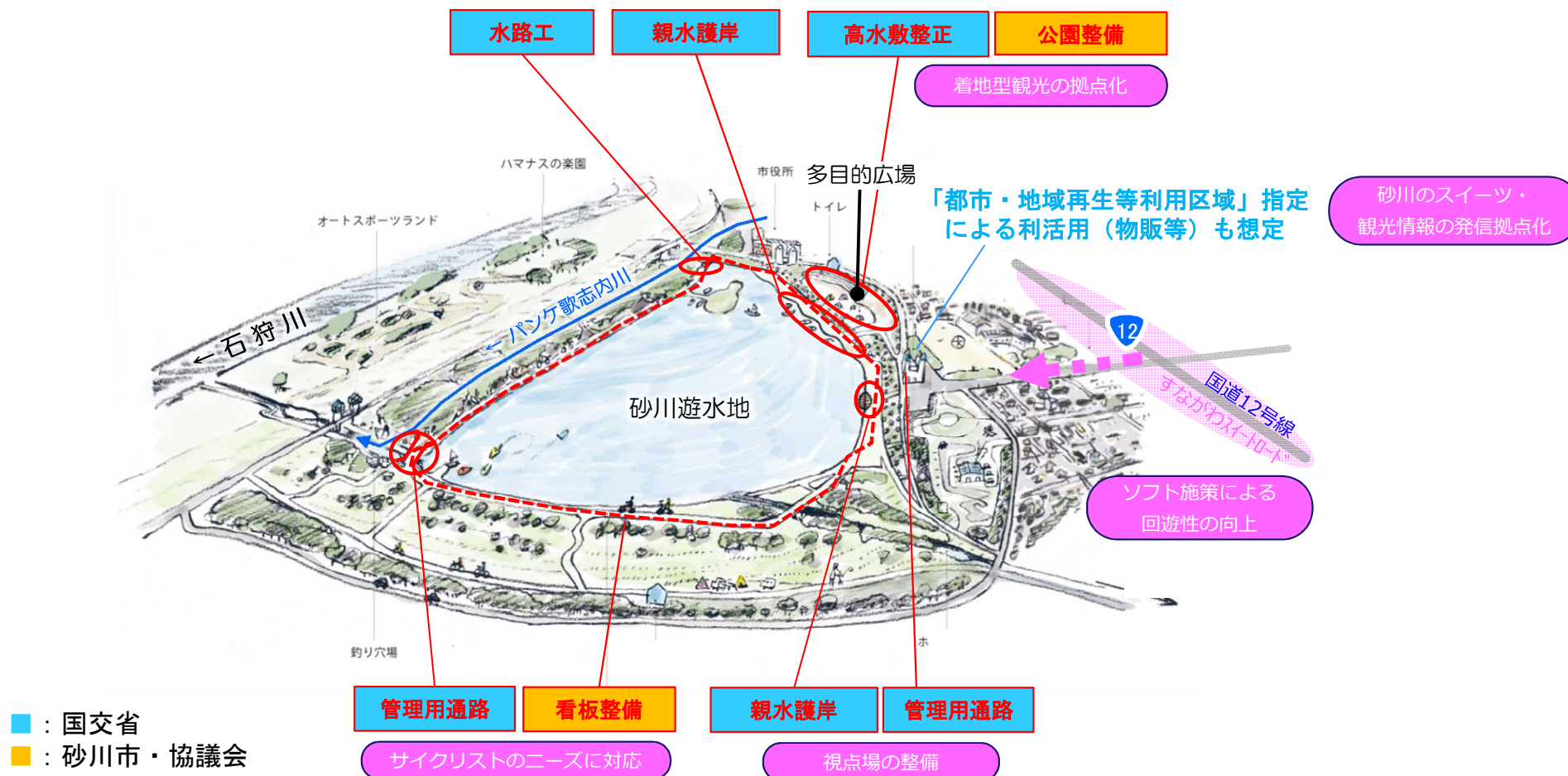


図 整備箇所

■高水敷整正

- ・遊水地北側の広場を、イベントやキャンプなど多目的利用が可能な場として整備します。



■管理用通路の整備

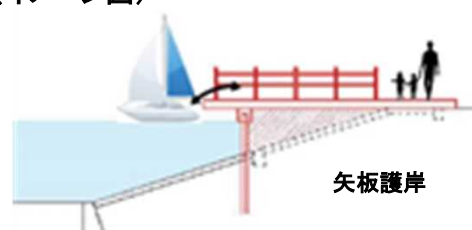
- ・湖面沿いの管理用通路が排水門部分で途切れているため、管理用通路を橋で接続し、周遊コースを設定します。
- ・砂川遊水地の周囲をめぐるサイクリングルートやフットパスコースとして活用します。



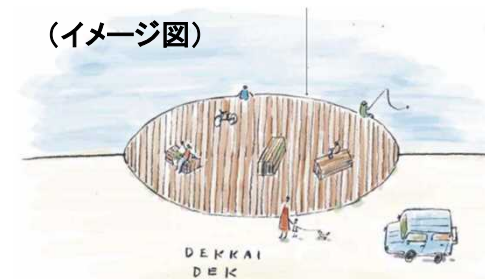
■親水護岸

- ・ウォーターヒルズスクエア正面の遊水地湖畔に、視点場と船着場を兼ねた親水護岸を整備し、広大で来訪者が分散しがちなオアシスパークにおけるランドマークとします。

(イメージ図)



(イメージ図)



- ・多目的広場からの動線上の水辺に、船着場を兼ねた緩傾斜の親水護岸を整備します。

(イメージ写真)



(イメージ写真)



■水路工

- ・遊水地（湖内）北側は流入河川がなく、水が滞留し、アオコの発生や水草の繁茂が見られることから、隣接するパンケ歌志内川から導水し、水の流れを創出するための水路工を整備します。
- ・アオコや水草の発生を抑え、快適な水面利用環境を提供します。



(5) 期待される効果

この取組により、親水護岸の整備や多目的広場の基盤整備などが実施され、地域の住民及び砂川市を訪れる観光客が、水上及び水辺での様々なレクリエーション活動を、より安全、快適に行えるようになります。

また、「すながわスイートロード」など地域活性化の取組と連携することで、まちなかと水辺との人の流れを作り出し、地域の観光振興や地域活性化が期待されます。

砂川遊水地の利用者数は順調に増加し、平成30年度は約2.4万人の利用がありました。

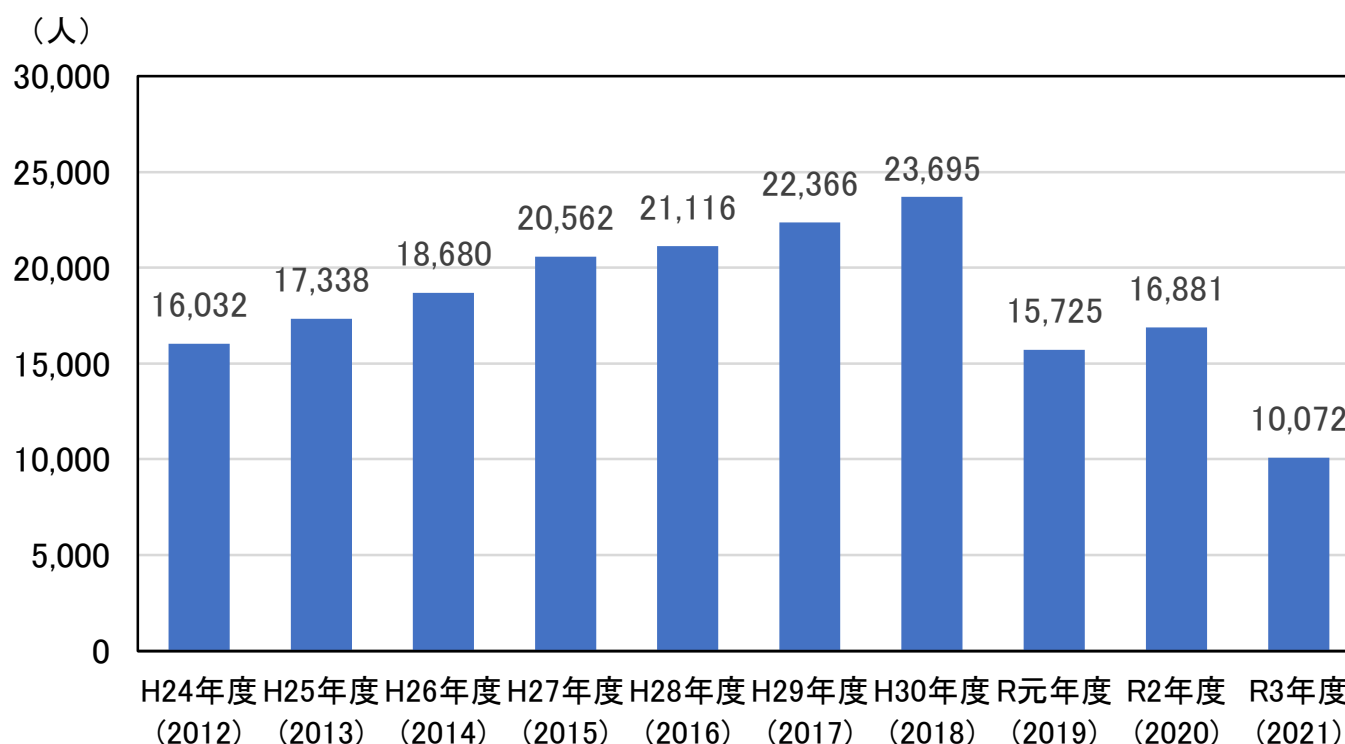


図 砂川遊水地利用者数(ウォーターヒルズスクエア入館者数)の推移

注) 令和2年1月以降、新型コロナウイルス感染者数の拡大を受けた外出自粛や休業要請、緊急事態宣言等の施策実施により、令和2年度以降の観光入込客数が大きく減少した。

3.3 事業の進捗の見込み

再評価

3.3.1 今後の事業スケジュール

砂川地区かわまちづくりについては、令和元年度から事業を実施中です。
直轄事業費約4.8億円※のうち、令和4年度末時点で約3.3億円の事業を実施しており、事業の進捗率は約68%です。

※その他費用として、自治体の事業費約0.5億円、国の河川改修費等約1.5億円を含め、総事業費は約6.7億円です。

令和5年度以降の事業

- ・国 : 「管理用通路」等
- ・砂川市・協議会 : 「公園整備」「看板整備」等

上記事業については引き続き、砂川市をはじめ地域の方々や関係機関と連携・調整を図りながら計画的に実施します。

表 事業の進捗状況

実施者	工 種	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10
河川管理者	計画・設計										
	高水敷整正										
	親水護岸										
	管理用通路										
	水路工										
	モニタリング										
砂川市・協議会	公園整備・看板整備等										

(オアシスパークからゆめまちづくり協議会と意見交換しながら詳細な内容を決定)

工事等期間 モニタリング期間

4. 恵庭かわまちづくりの概要

再評価

4.1 事業を巡る社会経済情勢の変化

4.1.1 河川環境を取り巻く状況

(1) 事業実施地域の概要

恵庭市は、北海道の空の玄関・新千歳空港と道都・札幌市との中間の交通の要所に位置するとともに、恵庭岳から流れ、サケも遡上・産卵する漁川が流れる自然あふれるまちです。

事業箇所である年間利用者100万人の「道と川の駅 花ロードえにわ」と近接する漁川の河川空間は、散策、ジョギングやサイクリングなどに利用され、市内外から多くの人々が訪れる水辺のレクリエーションエリアとなっています。



漁川
沿河市町村人口：約7万人
恵庭市
出典：住民基本台帳
(令和4年1月1日現在)



図 恵庭かわまちづくり対象地域及び周辺状況



写真 道と川の駅
花ロードえにわ

(2) 地域の現状と課題

恵庭市総合戦略 2018



当初平成 27 年 10 月

2016 改定平成 28 年 12 月

2018 改定平成 30 年 2 月

恵庭市

恵庭市は、水と緑豊かな石狩平野の平坦な地形の中、「空の玄関・新千歳空港」と「道都・札幌市」の中間に位置し、国道36号線やJR4駅を有するなど、優れた立地環境を有しています。

一方、人口減少や少子高齢化が急速に進む社会情勢においても高い持続性を確保するため、恵庭市のこれからのまちづくりの基本的な進め方として、「恵庭市総合戦略」(平成27年10月策定、平成28年12月及び平成30年2月改定)が策定されています。

総合戦略は、

- ・人がつながり人口減少に負けない魅力あるまちづくり
- ・安全安心に住み続けたくなるまちづくり
- ・恵庭らしさを活かした魅力あるまちづくり
- ・希望を持って子育てしたくなるまちづくり

を基本目標とし、施策の一つとして「ガーデンデザインプロジェクトの推進」を行うこととしています。

出典：「恵庭市総合戦略」（平成27年10月策定、平成30年2月改定）

※かわまちづくり計画登録申請（平成30年1月）時点

(3) 恵庭地区の課題

恵庭市では、「恵庭市総合戦略」に基づき、職・住・観光機能の拡充のため、「ガーデンデザインプロジェクト」を推進しており、事業箇所近接する道と川の駅周辺を「花のビレッジ」と位置付け、花の拠点(公園)の整備及び新住宅団地建設を進めています。

事業箇所である漁川の河川空間は、隣接する市街地で展開される花の拠点及び新住宅団地と一体となった新たな「恵庭市の交流観光の拠点」として、市民及び観光客が、気軽に自然と触れ合い、多様なレクリエーションを楽しみ過ごすことができる魅力あるレクリエーションエリアとしての役割を担うことが期待されており、河川空間へのアクセス向上、親水機能の向上等が課題となっています。

4. 1. 2 河川等の利用状況

事業箇所近接する「道と川の駅 花ロードえにわ」は、年間約100万人の利用者があり、えにわマルシェなど様々なイベントが実施されています。

また、「道と川の駅 花ロードえにわ」に隣接して水遊びのできる多目的広場ウォーターガーデンが設置されており、子供や家族連れでにぎわっています。

事業箇所である漁川の河川空間は、散策、ジョギングやサイクリングなどに利用され、市内外から多くの人を訪れる水辺のレクリエーションエリアとなっています。



写真 道と川の駅 花ロードえにわ



写真 えにわマルシェ



写真 ウォーターガーデン



写真 散策



写真 サイクリング

恵庭市の令和4年1月1日現在の人口は約7万人であり、近年、大きな変化はありません。

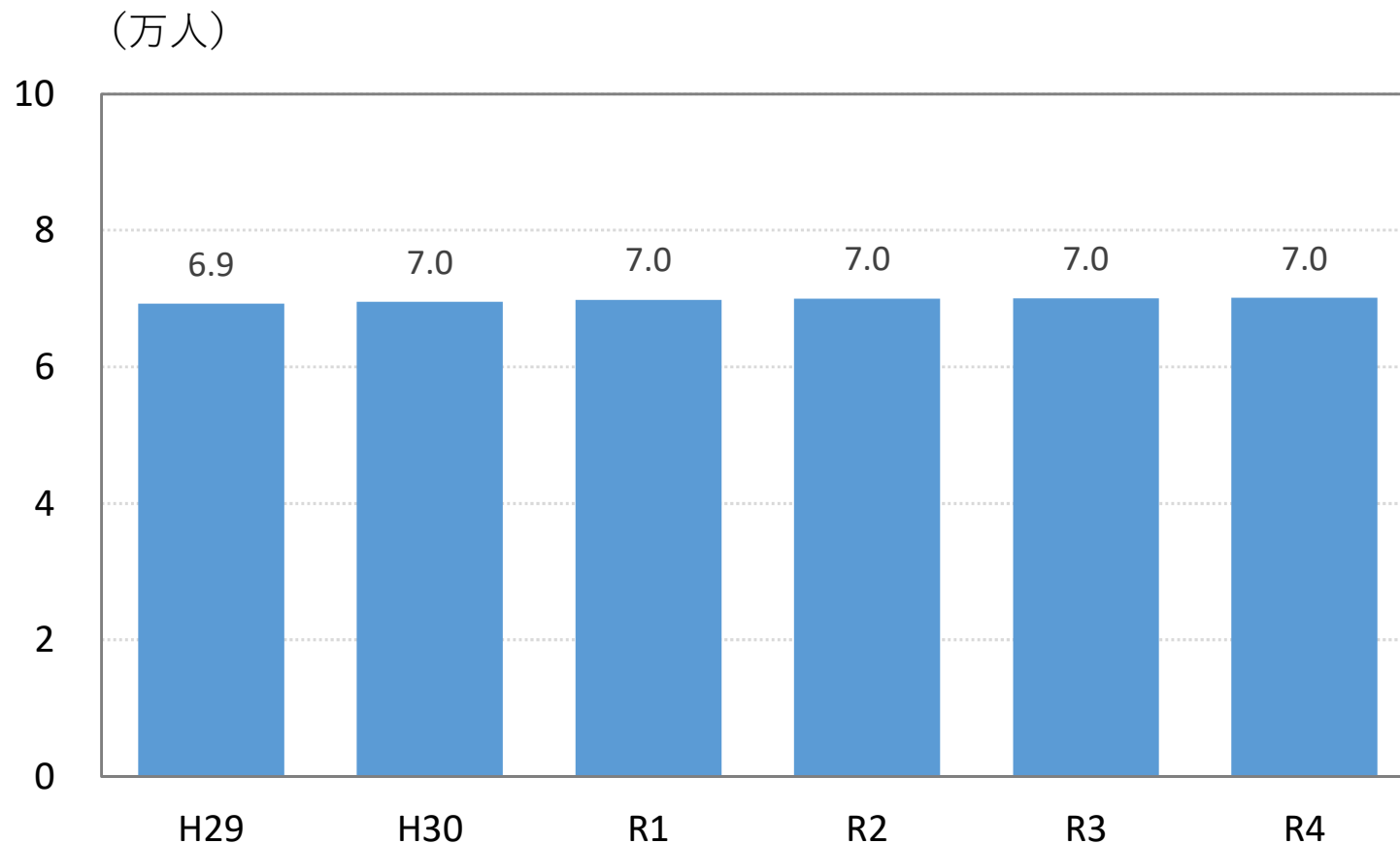


図 恵庭市における人口の推移

資料：住民基本台帳(各年1月1日)

4. 1. 4 地域の協力体制

恵庭市と関係団体、地域住民などで構成する「恵庭水と緑のまちづくり審議会」との協議を踏まえ、「ガーデンデザインプロジェクト」に沿ったかわまちづくりを計画しています。

また、「恵庭市観光推進協議会」、「恵庭一万本桜植樹市民の会」、「恵庭河川愛護会」などの恵庭市のまちづくりや観光推進の関係機関とも連携し、地域で一体となった体制で事業を進めています。

漁川では、従来から市民団体がごみ拾いや植樹・植栽活動を行うなど、河川愛護活動が続けられています。



写真 水と緑のまちづくり審議会



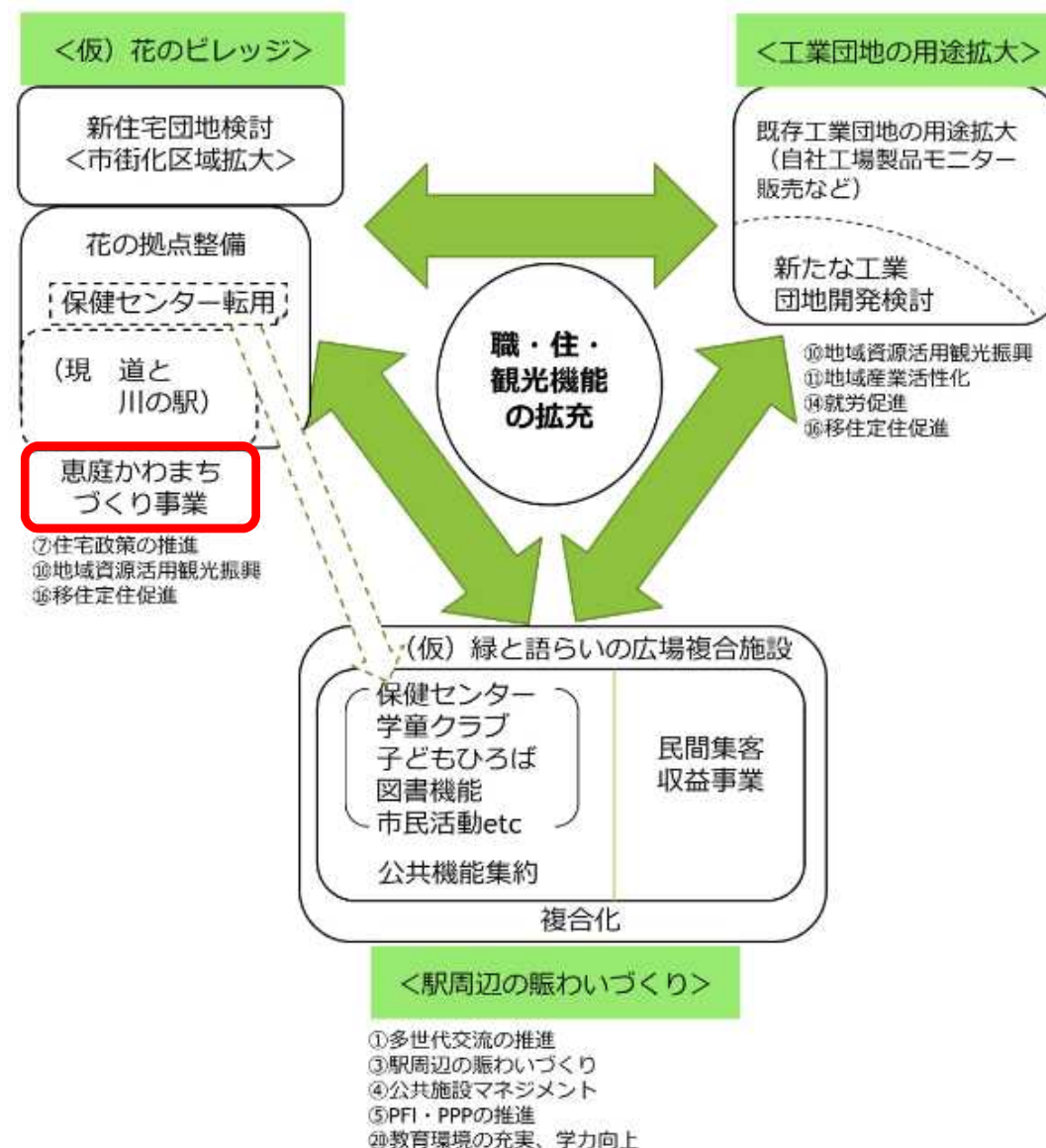
写真 市民団体による河川清掃活動

4. 1. 5 関連事業との整合

「恵庭市総合戦略」に基づき、恵庭市では「ガーデンデザインプロジェクト」として職・住・観光機能の拡充を推進しており、花のビレッジ（現 はなふる）、駅周辺の賑わいづくり、工業団地の用途拡大を機能的、複合的に推進すること等により、田園と都市の融合を目指しています。

恵庭かわまちづくりは、「花のビレッジ」構想の施策の一つに位置付けられており、事業箇所隣接する「花の拠点（公園）」及び「松園地区新住宅団地（スマートタウン）」と連携し、魅力的な河川空間の整備を図り、新しい「恵庭市の交流観光の拠点」の創出を目指しています。

ガーデンデザインプロジェクトの推進



出典：「恵庭総合戦略」

4. 2 事業概要及び進捗状況

(1) 事業の河川整備計画等の位置付け

当該整備については、「石狩川水系千歳川河川整備計画」(平成17年4月策定、平成27年3月変更)において「河川空間の利用に関する目標」として、『河川空間は、人々が川や水辺とふれあい親しめる場として利用されるよう関係機関と連携し、その整備に努める。』と位置付けられています。

(2) 事業の経緯

恵庭市では、「恵庭水と緑のまちづくり審議会」との協議を踏まえ、「かわまちづくり支援制度」を活用した「恵庭かわまちづくり」として国土交通省に申請し、平成30年3月26日に登録されました。

(3) 事業の目的

本事業は、恵庭市と国が連携し、漁川へのアクセス向上のための管理用通路及び親水施設の整備を行うものです。

隣接する花の拠点(公園緑地)整備及び民間による新住宅団地の計画と連携して、より魅力的な水辺空間を創造し、交流人口の増加、居住環境の向上等を目指しています。

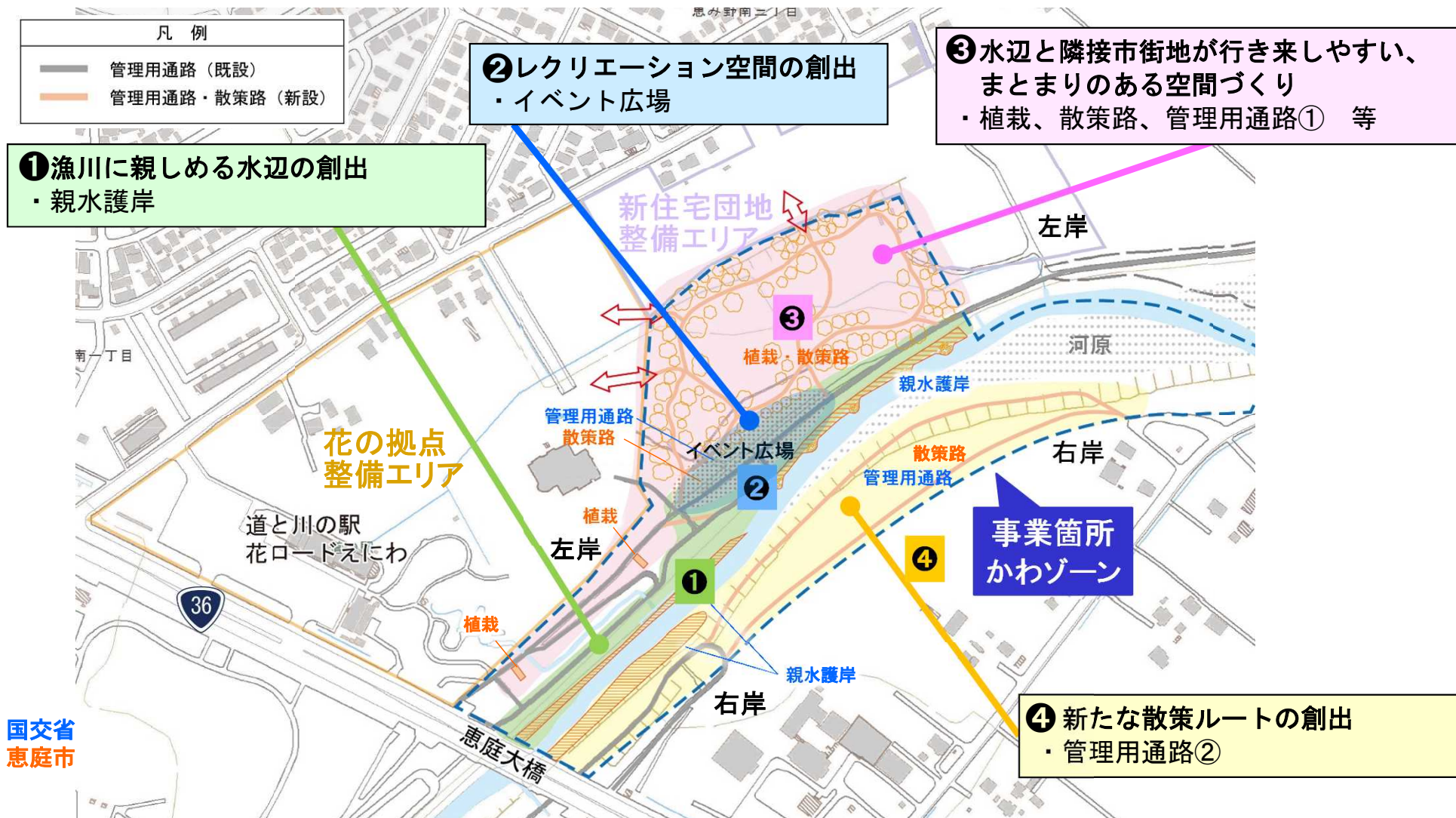
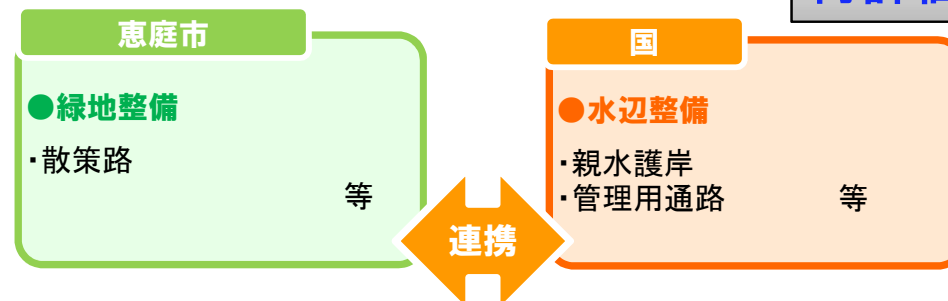


写真 事業箇所周辺

※はなふる 2020年11月11日オープン

(4) 整備の内容

自治体と国が連携して、親水護岸など水辺整備や散策路、植栽など公園緑地の整備を行います。



青文字：国交省
橙文字：恵庭市

① 漁川に親しめる水辺の創出

- ・ 親水護岸を整備して水際に近づきやすくし、水生生物観察や環境学習など、新たに、水際での安全な親水活動の場をつくります。



② レクリエーション空間の創出

- ・ 隣接する「花ロードえにわ」の各種イベントとの連携を可能にするイベント広場の基盤を整備し、新たに、水辺のイベント空間をつくります。



③ 水辺と隣接市街地が行き来しやすい、まとまりのある空間づくり

- ・ 隣接する市街地と漁川の境界部分に植栽、散策路、管理用通路などを整備し、隣接する市街地と水辺が、行き来しやすく、まとまりのある空間づくりをします。



④ 新たな散策ルートへの創出

- ・ 右岸側に、新たに管理用通路を整備し、水辺の散策、ジョギング、ウォーキングなどができる新たなレクリエーションの場をつくります。



(5) 期待される効果

この取組により、新たな親水エリアの創出や、これまでできなかった水際の水生生物観察などが可能になるとともに、隣接市街地と一体的な魅力的な水辺空間が形成されます。

近年、新型コロナウイルス拡大の影響により観光市場全体が落ち込んでいるなかで、令和2年3月にリニューアルオープンした「道と川の駅 花ロードえにわ」の利用者数が100万人以上を維持しており、併設された直売所の売上げが大きく増加しているなど、集客力の高い施設となっています。

これらの観光施設や、周辺で多数展開されているイベントとの連携により、地域の交流人口の増加や観光振興など地域活性化が期待されます。



観光施設利用状況



写真 道の駅周辺でのイベント開催状況
(第39回全国都市緑化北海道フェアin恵庭
ガーデンフェスタ北海道2022: 令和4年6月25日～7月24日開催)

4.3 事業の進捗の見込み

4.3.1 今後の事業スケジュール

恵庭かわまちづくりについては、令和元年度から事業を実施中です。

直轄事業費約4.8億円※のうち、令和4年度末時点で約3.6億円の事業を実施しており、事業の進捗率は約76%です。

※その他費用として、自治体の事業費約0.2億円、国の河川改修費等約0.6億円を含め、総事業費は約5.6億円です。

令和5年度以降の事業

・国 : 「管理用通路」等

上記事業については引き続き、恵庭市をはじめ地域の方々や関係機関と連携・調整を図りながら計画的に実施します。

表 事業の進捗状況

実施者	工 種	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10
河川管理者	計画・設計	■	■	■	■						
	親水護岸等		■	■	■						
	管理用通路①		■	■							
	管理用通路②				■	■					
	モニタリング	← (恵庭水と緑のまちづくり審議会等と意見交換しながら詳細な内容を決定) →					■	■	■	■	■
恵庭市	散策路等	■	■								

■ 工事等期間 ■ ■ ■ モニタリング期間

5. 石狩川下流幌向地区自然再生の概要

5.1 事業を巡る社会経済情勢の変化

5.1.1 河川環境を取り巻く状況

(1) 幌向地区の概要

幌向地区は、石狩川水系夕張川下流部に位置しており、周辺は、かつて幌向原野と呼ばれ、ボグ(ミズゴケなどを主体とする湿原)が存在していました。

現在の幌向地区周辺には、江別市、南幌町及び岩見沢市幌向市街地があり、下流側には道央自動車道、国道12号、函館本線などの基幹交通施設が位置しており、交通の要衝となっています。

幌向地区下流の左岸側堤内地には、この周辺が幌向原野と呼ばれていた頃からあった越後沼があり、かつての風景を残しています。

また、幌向地区を含む夕張川の高水敷の一部には、湿生植物が自生しています。



図 位置図

夕張川

沿河市町村人口：約 0.7万人

南幌町

出典：住民基本台帳

(令和4年1月1日現在)

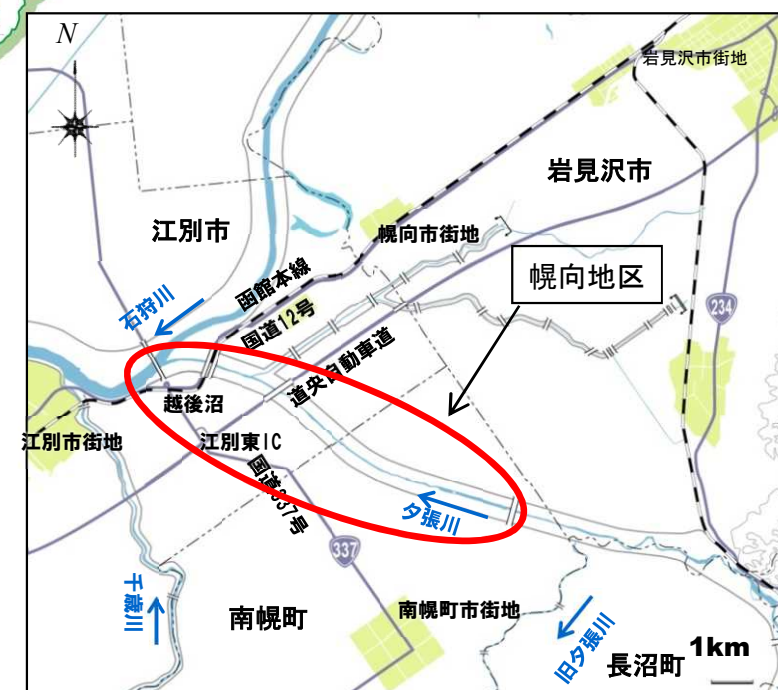


図 幌向地区周辺図

(2) 自然環境

再評価

(a) 物理環境

昭和初期に、それまで千歳川に合流していた夕張川を、幌向原野を貫流するように開削する治水事業が行われ、現在の夕張川の姿になりました。また、夕張川下流部の高水敷には、幌向原野の名残である高位泥炭が広く分布しています。

現在の幌向地区を含む夕張川の新水路区間は、ほぼ直線の低水路河道で、高水敷が広いという特徴があります。

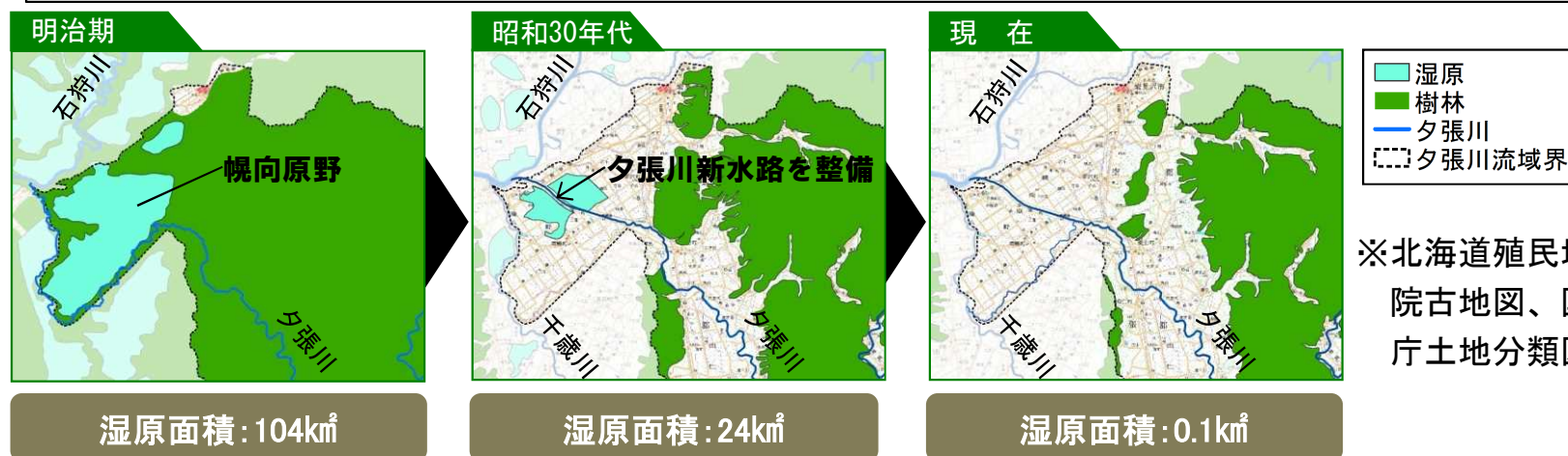


図 夕張川流域の湿原面積の変遷

※北海道殖民地選定報文附図、国土地理院古地図、国土地理院地形図及び国土庁土地分類図(土壌図)をもとに作成。

(b) 生物環境

幌向地区の周辺は、河岸部にヤナギ属を中心とした樹林帯が形成され、多様性が低い状況となっています。高水敷は主にヨシ等の草本群落が分布しています。

河川水辺の国勢調査（清幌橋地点）では、水面や水際ではカルガモ、オオジシギ、カワセミ等の鳥類、水域にはウグイ類などコイ科の魚類やカワヤツメ等の生息を確認しています。



カワセミ



マガモ



オオジシギ



カワヤツメ

(3) 幌向地区の変遷

再評価

幌向原野は、石狩川や夕張川・千歳川等に囲まれた低平地に発達した湿原で、周縁部にはフェン（ヨシなどを主体とする湿原）、中央部にはボッグ（ミズゴケなどを主体とする湿原）が分布していました。

幌向原野で発見され、ホロムイを冠する和名が付けられた7種の湿生植物「ほろむい七草」は、湿原の減少に伴い、ほとんど確認されなくなっていました。近年の調査の結果、かつての幌向原野や周辺の原野で、平成24年までに7種全てが確認されました。

しかし、これらの湿生植物が自生可能な環境は限られており、夕張川の高水敷に高層湿原を再生することが重要です。

フェン

- ・ 低位泥炭の上に形成
- ・ ヨシやスゲ属が優占
- ・ 地表涵養性



フェンの景観（安平川湿原）

ボッグ

- ・ 中間～高位泥炭の上に形成
- ・ スゲ属やミズゴケ属が優占
- ・ 降水涵養性



ボッグの景観（サロベツ湿原）

<フェンとボッグ>



ホロムイスゲ



ホロムイイチゴ



ホロムイソウ



ホロムイツツジ



ホロムイコウガイ

絶滅危惧ⅠB類(環境省2012)、
絶滅危急種(北海道RDB2001)



ホロムイクグ

絶滅危惧Ⅱ類(環境省2012)、
絶滅危急種(北海道RDB2001)



ホロムイリンドウ

希少種(北海道RDB2001)

<ほろむい七草（主にボッグに生育）>

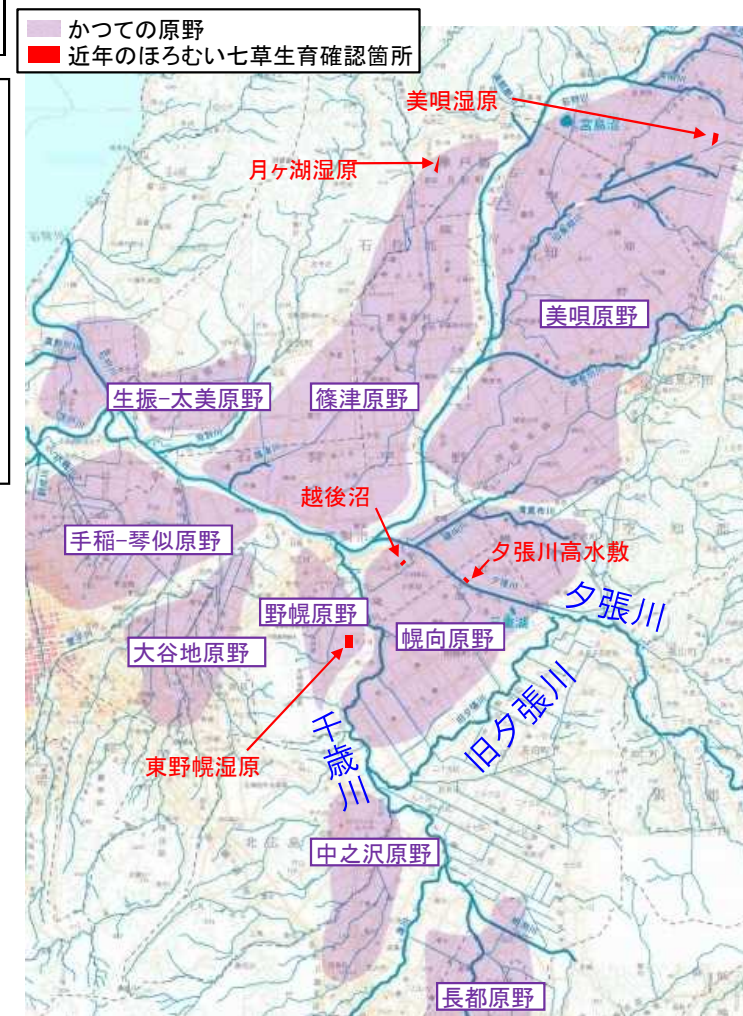


図 かつての原野と近年の
ほろむい七草確認箇所

(4) 幌向地区の課題

夕張川の高水敷では、地表面付近の水分の染み出しにより泥炭層の表面から乾燥し、分解が進行しています。

その結果、本来は、泥炭地では見られないオオアワダチソウ(外来種)等の乾いた所を好む植物が高位泥炭地に侵入し、ホロムイコウガイ等の地域固有の希少な湿生植物の生育環境が消失してきている状況にあり、このまま放置すると、貴重なボッグが失われるおそれがあります。



5. 1. 2 河川等の利用状況

再評価

計画地周辺は、地域のNPO法人によるフットパス行事、環境教育・研究の場等として利用されています。



フットパス行事の状況
(夕張川高水敷のゴミ拾い)



高校生の現地見学会



研究機関の現地視察

5. 1. 3 地域開発の状況

南幌町の令和4年1月1日現在の人口は約0.7万人であり、近年、若干の減少傾向にあります。

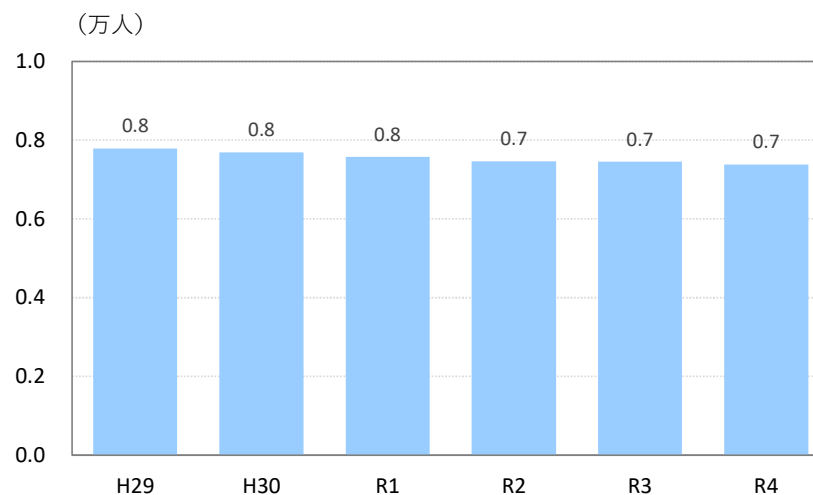


図 南幌町における人口の推移

資料：住民基本台帳(各年1月1日) 48

「北海道河川環境整備促進協議会」及び「空知地方総合開発期成会」から、夕張川の自然再生の取組が要望されています。

「石狩川下流幌向地区自然再生実施計画書」に基づき、維持管理や環境教育、モニタリング調査、情報の発信・提供などについて地域のNPO、専門家、住民などと連携しながら取り組んでいます。

これまで、地元NPO主催のフットパスイベントと連携した自然再生の紹介や地元自治体や教育委員会、郷土史研究会、NPO団体等からなる「幌向地区自然再生ワークショップ」による自然再生フォーラムの開催などの取組が実施されています。

さらに、NPO等地域団体の連携による環境教育やフットパスイベントの取組、石狩川沿川の活動団体からなる「石狩川流域 湿地・水辺・海岸ネットワーク」の設立など、連携協働の輪も広がっています。



ミズゴケ移植体験（主催：NPO法人ふらっと南幌）



環境カウンセラーによる地元高校での環境学習
(共催：NPO法人北海道環境カウンセラー協会、
環境学習フォーラム北海道、NPO法人ふらっと南幌)



自然再生フォーラムの開催
(主催：幌向地区自然再生
ワークショップ)



地元NPO団体主催のフットパスでの
自然再生の紹介
(主催：NPO法人ふらっと南幌、
共催：(公財) 北海道新聞野生生物基金
石狩川流域湿地・水辺・海岸ネットワーク)

5. 1. 5 関連事業との整合

幌向地区の自然再生は、体験学習、環境教育など自然環境の保全に対する啓発や、幌向地区で再生される景観や様々な植生の観光資源としての活用を促進するなど、地域活性化に資する取組を行い、地域社会に貢献していきます。

5. 2 事業概要及び進捗状況

(1) 事業の河川整備計画等の位置付け

当該整備については、「石狩川水系夕張川河川整備計画」(平成17年度策定、平成27年3月変更)において、『夕張川における自然再生については、「石狩川下流幌向地区自然再生実施計画」等を踏まえ、「石狩川水系河川環境管理基本計画」と整合を図りつつ実施する。その実施にあたっては、地域において関係機関等と連携し、モニタリングしながら段階的に事業を実施していき、その状況に応じて計画を順応的に見直していく。』と位置付けられています。

(2) 事業の経緯

平成26年3月には、計画地周辺で実際に活動している地域活動団体、住民代表、関係行政機関、河川管理者などからなる「石狩川下流幌向地区自然再生ワークショップ」により、「石狩川下流幌向地区自然再生実施計画書」を策定し、地域と連携、協働した取組を進めています。

(3) 事業の目的

幌向地区の自然再生は、石狩川下流において大きく減少した湿原の再生を目指し、石狩川下流自然再生計画書に基づき、石狩川の湿原の特徴であるボッグを中心とした湿原を再生するものとします。整備に当たっては、目指す環境が最小限の人為的な補助により自然に再生されることを基本とします。

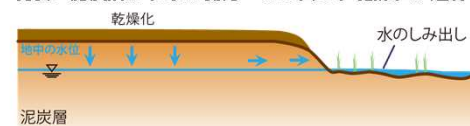
(4) 整備の内容

現況の地形特性を活用しながら、ボッグの基盤となるミズゴケ属の生育に適した水環境が維持されるようにし、目標とする自然環境が、できるだけ自然の営力によって生み出されていくように自然再生を計画しています。

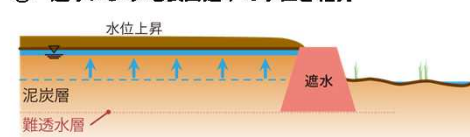
湿原再生のための整備

泥炭層の乾燥化を防ぐため、泥炭層からの水のしみ出しを抑制し、地中の水位を安定させて湿生植物が生育できるように整備します。

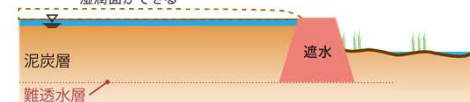
現状：泥炭層から水が側方へしみ出し、乾燥化が進行



①：遮水により地表面近くで水位を維持



②：乾燥した地表面の泥炭をすき取り、湿潤面を露出



移植の流れ

移植前

残存する泥炭を保全し、水分条件を整えます。



移植

ほろむい七草の他、地域の希少種を移植します。



移植後

移植したミズゴケ属や湿生植物の苗等が成長して群落を形成します。



これにより、かつて幌向原野に自生していたほろむい七草を始めとした湿生植物が生育する湿原環境が、保全・再生されるとともに、外来植物の侵入抑制が期待されます。

図 整備の内容

(5) 期待される効果

ほろむい七草を始めとした希少な湿生植物の生育地の形成に向け、ミズゴケ属の群落に代表される多様なボグの生育環境の形成が期待されます。また、このボグの周辺では、ヨシ属・スゲ属群落に代表される多様なフェンの形成など、整備箇所周辺とボグの間の移行帯の形成が期待されます。現在、遮水壁の設置により湿地面積が回復傾向にあり、その効果が発現しています。



5.3 事業の進捗の見込み

再評価

5.3.1 今後の事業スケジュール

幌向地区自然再生については、平成26年3月に策定された「石狩川下流幌向地区自然再生実施計画書」に基づき、事業を実施中です。

総事業費約4.0億円のうち、令和4年度末現在で3.1億円の事業を実施しており、事業の進捗率は76%です。

令和5年度以降の残事業

・国：「管理用通路」等

上記事業については、引き続き「石狩川下流幌向地区自然再生ワークショップ」を通じ、地域の方々、関係行政機関と連携・調整を図りながら計画的に実施し、湿地環境の再生を図ります。

表 事業の進捗状況

工種		H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
自然再生調査・検討		■	■								
湿地整備	遮水工		■	■	■						
	高水敷整正				■	■					
	植生移植等			■	■	■					
	管理用通路									■	■
モニタリング等		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

6. 美瑛川地区かわまちづくりの概要

6. 1 事業を巡る社会経済情勢の変化

6. 1. 1 河川環境を取り巻く状況

(1) 美瑛地区の概要

美瑛川は、美瑛町から旭川市にかけて流れる、全長67.6kmの一級河川石狩川の支川です。十勝岳連峰のツリガネ山を水源とし、白金温泉、美瑛町を流下し旭川市街地で石狩川の支川である忠別川に合流します。上流の十勝岳は活火山であるため、火山砂防施設の整備も進められています。

主要流入河川：美瑛川
沿河市町村人口：約1万人
美瑛町
出典：住民基本台帳
(令和4年1月1日現在)



美瑛川



図 美瑛川地区かわまちづくり対象地域及び周辺状況

(2) 美瑛川周辺の現状

美瑛町は、十勝岳山麓に位置し、「丘のまちびえい」として知られており、市街部周辺の丘陵地の美しい景観や、壮大な山岳景観がみられる白金温泉を有し、観光地として賑わいを見せています。近年、世界的に有名となった白金地区に隣接する「青い池」には、春から秋にかけて大勢の観光客が訪れており、平成30年5月には道の駅びえい「白金ビルケ」がオープンしました。美瑛町では、平成21年度から「美瑛センチュリーライド」を実施し、サイクルツーリズムの普及・振興に努めており、自転車を利用して近隣の観光資源にアクセスする観光客も増加しています。

また、美瑛町を貫流している美瑛川は、川そのものの美しさや、川からの眺望、川での多目的利用など、特色のある気候・風土を活かした町づくりに向け地域と連携を図っています。

<観光入込客数>

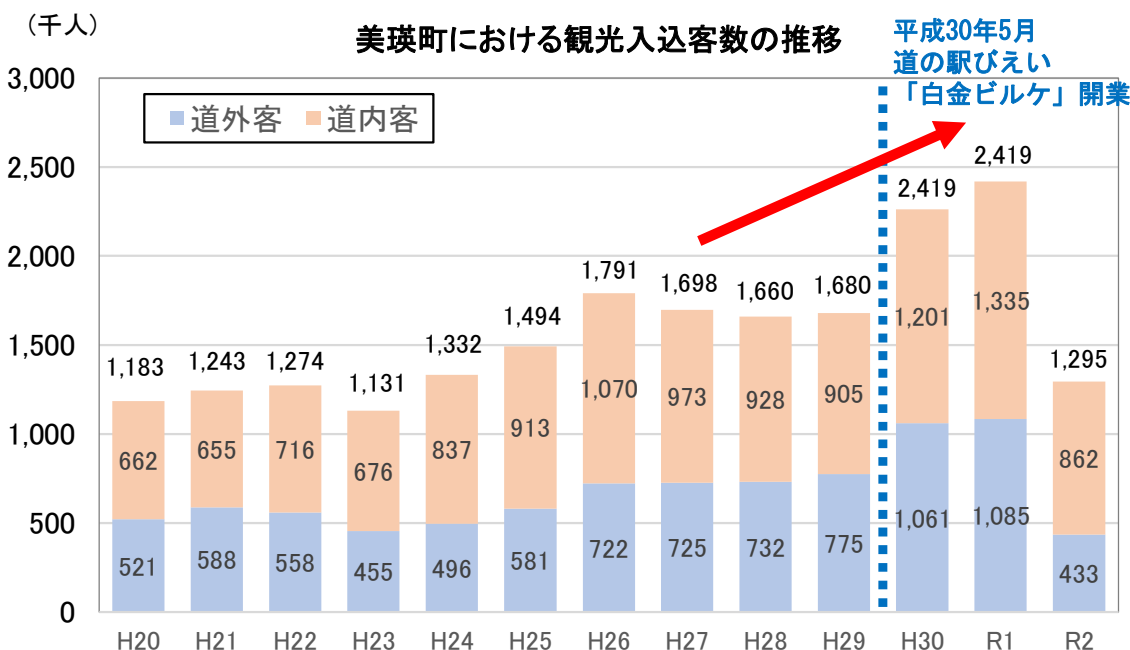


図 観光入込客数の推移

注) 令和2年1月以降、新型コロナウイルス感染者数の拡大を受けた外出自粛や休業要請、緊急事態宣言等の施策実施により、令和2年度以降の観光入込客数が大きく減少した。

<豊かな地域資源>



センチュリーライド(美瑛町HPより)



青い池



道の駅びえい
「白金ビルケ」

(3) 美瑛地区周辺の現状と課題

美瑛町は、近年、青い池が観光名所となったほか、周辺に道の駅びえい「白金ビルケ」がオープンしたこともあり、多くの観光客が来訪して観光入込客数が増加していますが、宿泊客数は減少しており、通過型の観光になっていることが課題となっています。

また、サイクリングイベント「センチュリーライド」の実施などにより、自転車利用者が増加していますが、丘陵地帯と白金温泉を結ぶ道道は観光シーズンの交通量が多く、安全性が確保できない状況にあります。



観光地を結ぶ道道の状況

＜上下流に分かれた観光地＞

美瑛町を貫流している美瑛川では、川そのものの美しさや、川からの眺望、川での多目的利用など、特色のある気候・風土を活かした町づくりに向け地域と連携を図っているところです。しかし、多くの観光資源は、美瑛川の上流(山岳・温泉エリア)と下流(丘陵・市街エリア)に分かれているため、つながりとしての川の役割が期待されています。

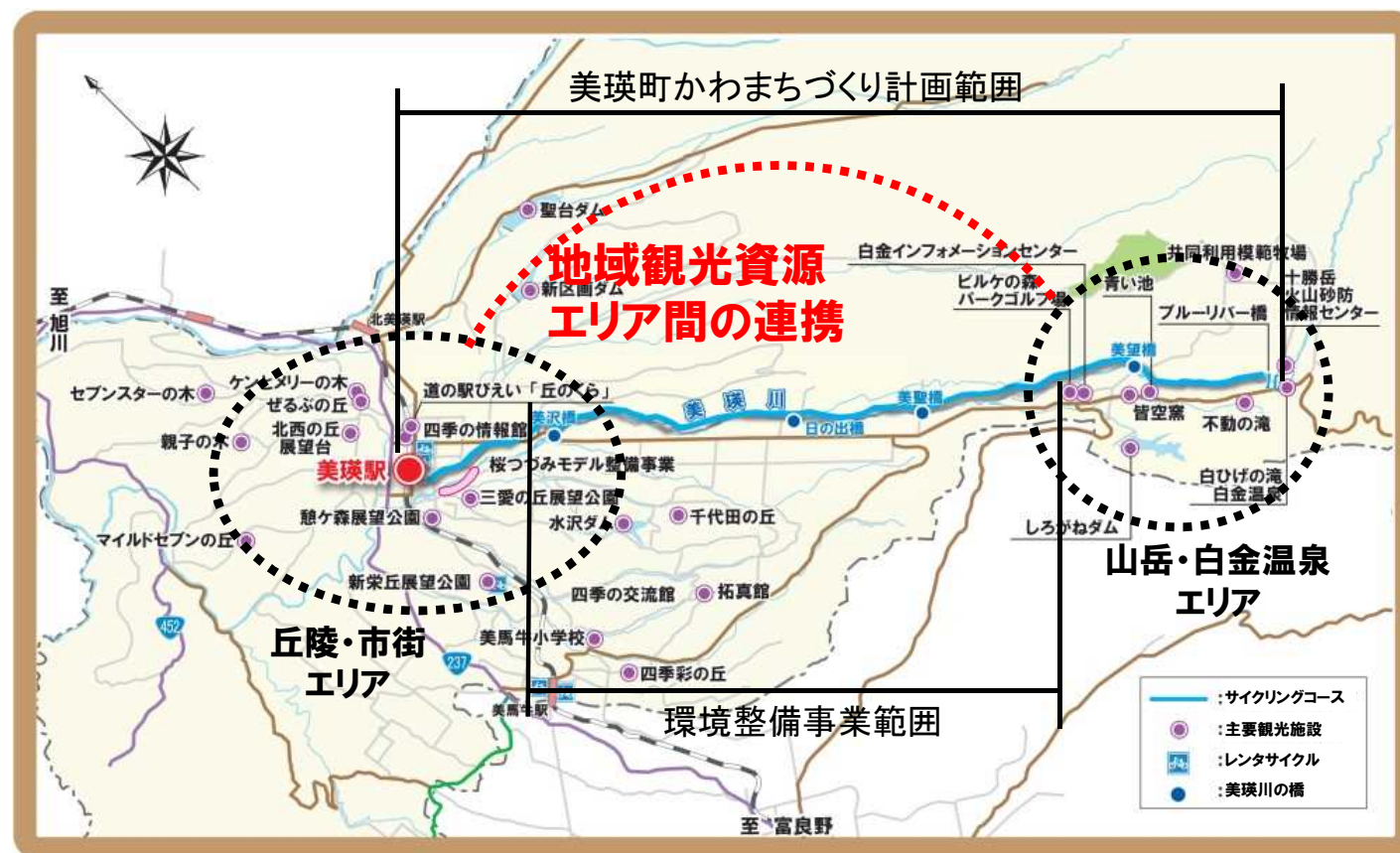


図 観光エリア区分

6. 1. 2 河川等の利用状況

美瑛川沿いの堤防は、各種スポーツイベントや日々の散策等に利用されています。



宮様国際スキーマラソン
平成28年2月(旭川開発建設部)



びえいヘルシーマラソン
平成28年6月(旭川開発建設部)

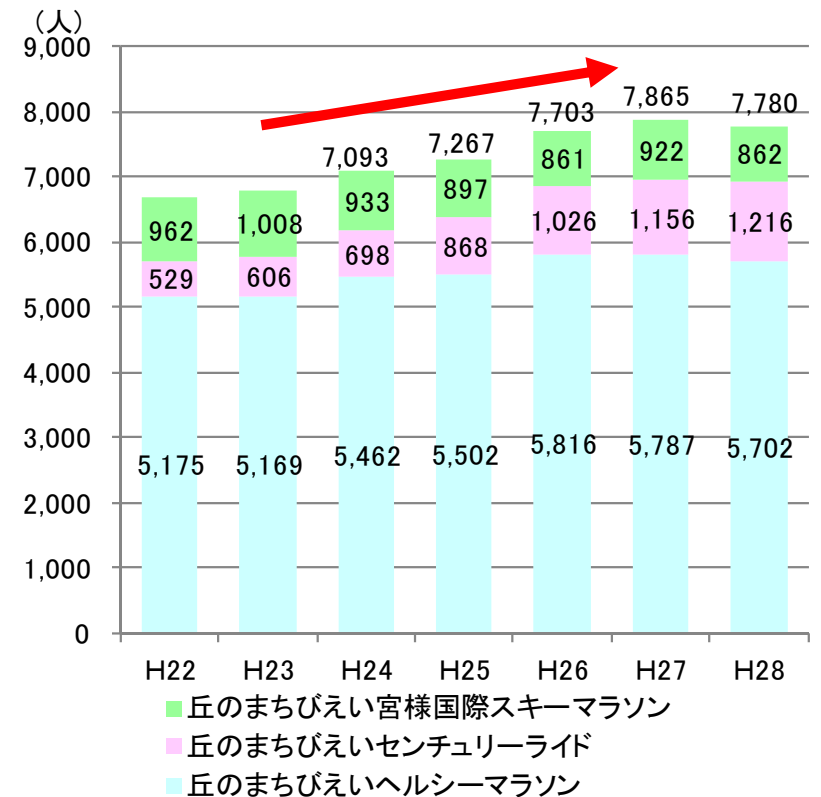


図 イベント参加者数の推移

6. 1. 3 地域開発の状況

美瑛町の近年の人口は約1万人で減少傾向にあり、少子高齢化の影響で高齢化率は上昇傾向にあります。

観光面では、美瑛センチュリーライドなどのスポーツイベントの開催や、青い池の観光地化、道の駅びえい「白金ビルケ」の新規オープンなどにより、観光入込客数は近年増加傾向にあります。一方で、丘陵地を訪れた人が白金温泉で滞在するという動線が定着しておらず、町内全体の宿泊客数は減少する通過型の観光になっていることが課題となっています。

また、都市公園の面積は、平成22年以降横ばいとなっています。

6. 1. 4 地域の協力体制

流域自治体等で構成される「北海道河川環境整備促進協議会」「北海道上川地方総合開発期成会」「石狩川上流治水促進期成会」等の期成会から、美瑛川地区の環境整備事業促進が要望されています。

美瑛町では、地元関係団体、有識者、行政関係者などからなる「十勝岳・美瑛川地域連携施策検討委員会」が平成25年7月に設立され、美瑛川の堤防をサイクリングコースとして利用し、地域経済活性化を目指すための方策や、美瑛川沿いの砂防設備の周知、火山災害に関する防災意識向上を図る方策が検討され、同年12月に「美瑛川周辺における地域活性化のための整備のあり方に関する提言」がまとめられました。

また、平成27年11月より「美瑛川地区かわまちづくりWG」を設立し、美瑛川沿いのサイクリングコースに必要な整備内容、地域との連携方法等について検討し、効果的な整備を推進しています。

さらに、地元住民等による防災施設の現地研修会も行われており、河川の利用に関しても、河川管理者、住民、学校などが、連携しながら河川清掃等の維持管理や防災・環境教育などに取り組んでいます。



美瑛川地区かわまちづくりWG
(検討会)



美瑛川・青い池サイクリング
コース開通記念時の走り初め



清掃活動



水生生物調査

6. 1. 5 関連事業との整合

<十勝岳・美瑛川地域連携施策検討委員会>

本検討委員会は、地元関係団体、有識者、行政関係者などから構成され、美瑛川沿いのサイクリングコース整備を通じた地域経済活性化や、砂防設備を利用した防災意識向上を図る方策の検討を目的として、平成25年7月に設置されました。

委員会は、平成25年7月から平成25年11月まで、現地視察も含めて3回、加えて、地元関係者からの意見聴取も1回開催され、それらの検討結果は「美瑛川周辺における地域活性化のための整備のあり方に関する提言」としてまとめられ、検討委員会から美瑛町に提出されました。



第1回委員会



現地視察

委員会開催状況

<美瑛川地区かわまちづくり>

美瑛町では、「十勝岳・美瑛川地域連携施策検討委員会」及び地元関係者協議の検討結果を踏まえ、美瑛川地区水辺整備として「駐車場の確保」、「案内看板の設置」、「休憩所などの設置」及び「景観への配慮」について計画しています。

この計画は、「かわまちづくり支援制度」を活用した「美瑛川地区かわまちづくり」として国土交通省に申請し、平成26年3月26日に登録されました。

6. 2 事業概要及び進捗状況

(1) 事業の河川整備計画等の位置付け

当該整備については、平成19年9月に策定した石狩川(上流)河川整備計画で『石狩川上流の豊かな自然を利用したスポーツや憩いの場、人々が自然と親しめるようなふれあいの場などについては、地域住民、自治体、関係機関等と調整・連携を図り、地域づくりと一体となった川づくりを推進する』と位置付けられています。

(2) 事業の経緯

美瑛町では、「十勝岳・美瑛川地域連携施策検討委員会」及び地元関係者協議を踏まえ、美瑛川の堤防のサイクリングコースとしての活用を計画しています。この計画は、「かわまちづくり支援制度」を活用した「美瑛川地区かわまちづくり」として国土交通省に申請し、平成26年3月26日に登録されました。

さらに、平成27年11月に、サイクリスト、沿川のカフェ経営者等から意見を伺う「美瑛川地区かわまちづくりWG」を設立し、より具体的な整備内容や利活用の促進等についての議論を進めています。

(3) 事業の目的

本事業は、道道の近くを流れる美瑛川の河川空間をサイクリングコースとして活用し、上下流に分かれている観光地を結ぶことで、市街部周辺の観光地から白金温泉地区への観光客の誘導を行い、周遊性の向上による地域活性化やインバウンドを含めた観光の促進を図ります。

(4) 整備の内容

美瑛町によるまちづくりと連携して、高水敷整正や河川管理用通路等を整備し、川を活用したサイクリング等による地域活性化やインバウンドを含めた観光の促進を図ります。

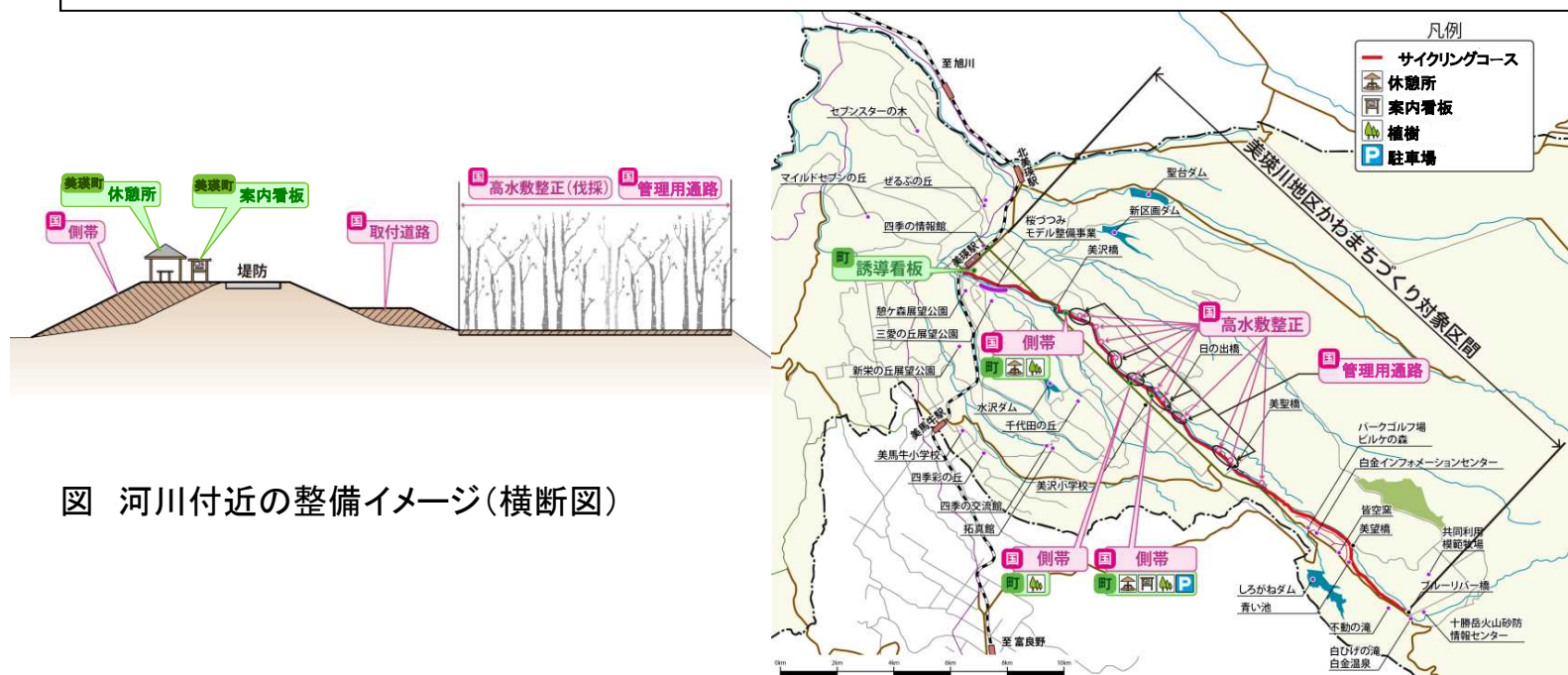


図 河川付近の整備イメージ(横断図)

図 事業区域の整備内容

(5) 期待される効果

美瑛町によるまちづくりと連携して、美瑛川の河川空間をサイクリングコースとして活用することにより、地域の活性化、滞在型観光の振興等が期待されます。

また、ジョギング・クロスカントリースキー等の新たな地域資源の創出、自転車や歩行者の安全性向上、観光客の増加等による地域振興が期待されます。



青い池を訪れる外国人観光客



美瑛川地区かわまちづくりWGによる現地試走状況

7. 事業の投資効果

江別市かわまちづくり：《水辺整備》

本整備箇所期待される、江別市かわまちづくりの効果を、CVM(仮想的市場評価法)を用いて評価しました。

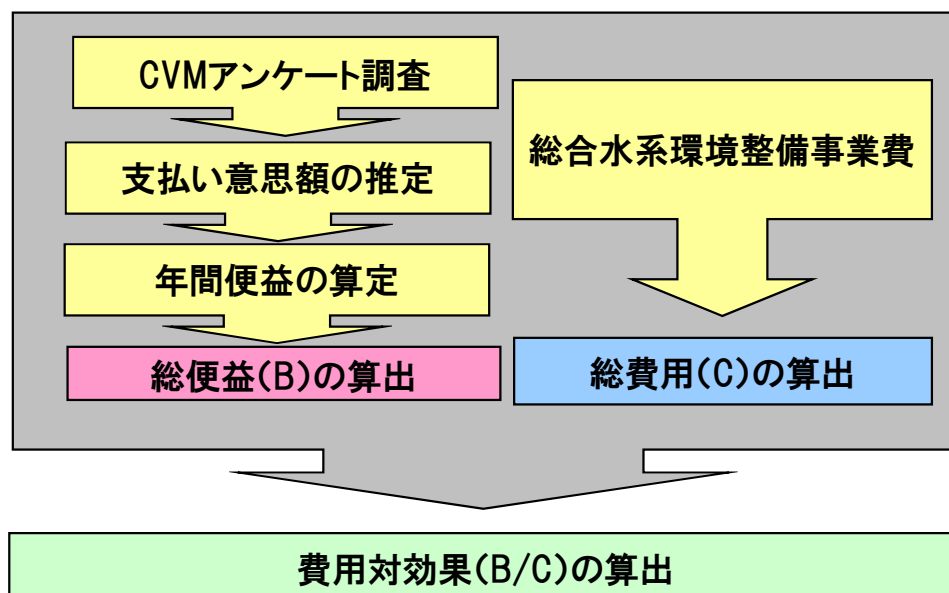


図 費用対効果算出フロー

●住民アンケート

対象地域：整備箇所10km圏内の自治体（江別市、南幌町）
 質問内容：江別市かわまちづくりに負担できる金額
 調査時期：2022年5～6月
 配布部数：1,500
 抽出方法：住民基本台帳により抽出した世帯に対して
 郵送アンケートを実施
 回収方法：郵送配布、郵送回収（無記名方式）
 回収数：709（回収率47.3%）
 支払い意思額：429円/世帯/月（5,148円/世帯/年）
 世帯数：10km圏内2自治体 62,161世帯
 （令和3年1月の住民基本台帳）

●観光客アンケート

対象地域：江別市及び南幌町の主要観光施設
 （アースドリーム角山農場、江別エブリ（赤レンガ工場跡）、ゆめちからテラス、なんぼろ温泉）
 質問内容：江別市かわまちづくりに負担できる金額
 調査時期：2022年5月
 調査方法：面接方式
 回収数：982票
 支払い意思額：日帰り客 825円/人・日
 観光客数：日帰り客 527,965人・日/年

江別市かわまちづくり：《水辺整備》

費用対効果分析（全体事業）

●算出の条件

評価基準年度：令和4年度
 整備期間：令和5年～令和14年（10年間）
 評価対象期間：令和5年～令和64年（整備期間＋50年間）

総便益（B）	便益	110億円
	残存価値	0.01億円
		110億円
総費用（C）	建設費	5億円
	維持管理費	0.3億円
		5億円
費用対効果（B/C）		20.5
純現在価値（B-C）		105億円
経済的内部収益率（EIRR）		23.9%

※総費用には、自治体による整備も含む。

●感度分析

全体事業	基本	残事業費		残工期		資産	
		-10%	+10%	-10%	+10%	-10%	+10%
費用対効果 (B/C)	20.5	22.6	18.7	21.2	19.9	18.4	22.5

砂川地区かわまちづくり：《水辺整備》

事業目的に変更が無いなどの費用対効果分析判定の結果から、令和4年度は、費用対効果分析を実施しないものとしました。

費用対効果分析実施判定票

年 度： 令和4年度

事 業 名： 石狩川総合水系環境整備事業(砂川地区かわまちづくり)

担当課： 河川計画課

担当課長名：時岡 真治

※各事業において全ての項目に該当する場合には、費用対効果分析を実施しないことができる。

項 目		判 定	
		判断根拠	チェック欄
(ア) 前回評価時において実施した費用対効果分析の要因に変化が見られない場合			
事業目的			
	・事業目的に変更がない	事業目的に変更がない	■
外的要因			
	・事業を巡る社会経済情勢の変化がない	地元情勢等の変化がない。	■
内的要因＜費用便益分析関係＞			
	1. 費用便益分析マニュアルの変更がない	B/C 算定方法に変更がない。	■
	2. 需要量等の変更がない	需要量等の減少が10%以内	■
	3. 事業費の変化	【事業費の増加が10%以内】 事業費の変化がない	■
	4. 事業展開の変化	事業期間に変化がない	■
(イ) 費用対効果分析を実施することが効率的でないと判断できる場合			
	・事業規模に比して費用対効果分析に要する費用が大きい または、前回評価時の感度分析における下位ケース値が基準値を上回っている。	■ 前回評価時の感度分析における下位ケース値が基準値を上回っている 前回評価時：15.9 ≧ 基準値(1.0)	■
前回評価で費用対効果分析を実施している		前回実施平成30年度：B/C = 17.6	■
以上より、費用対効果分析を実施しないものとする。			

恵庭かわまちづくり：《水辺整備》

事業目的に変更が無いなどの費用対効果分析判定の結果から、令和4年度は、費用対効果分析を実施しないものとしました。

費用対効果分析実施判定票

年 度： 令和4年度

事 業 名： 石狩川総合水系環境整備事業(恵庭かわまちづくり)

担当課： 河川計画課

担当課長名：時岡 真治

※各事業において全ての項目に該当する場合には、費用対効果分析を実施しないことができる。

項 目		判 定	
		判断根拠	チェック欄
(ア) 前回評価時において実施した費用対効果分析の要因に変化が見られない場合			
事業目的			
	・事業目的に変更がない	事業目的に変更がない	■
外的要因			
	・事業を巡る社会経済情勢の変化がない	地元情勢等の変化がない。	■
内的要因＜費用便益分析関係＞			
	1. 費用便益分析マニュアルの変更がない	B/C 算定方法に変更がない。	■
	2. 需要量等の変更がない	需要量等の減少が10%以内	■
	3. 事業費の変化	【事業費の増加が10%以内】 事業費の変化がない	■
	4. 事業展開の変化	事業期間に変化がない	■
(イ) 費用対効果分析を実施することが効率的でないと判断できる場合			
	・事業規模に比して費用対効果分析に要する費用が大きい または、前回評価時の感度分析における下位ケース値が基準値を上回っている。	■ 前回評価時の感度分析における下位ケース値が基準値を上回っている 前回評価時：22.4 ≥ 基準値(1.0)	■
前回評価で費用対効果分析を実施している		前回実施平成30年度：B/C = 24.9	■
以上より、費用対効果分析を実施しないものとする。			

石狩川下流自然再生（幌向地区）：《自然再生》

事業目的に変更が無いなどの費用対効果分析判定の結果から、令和4年度は、費用対効果分析を実施しないものとしました。

費用対効果分析実施判定票

年 度： 令和4年度

事 業 名： 石狩川総合水系環境整備事業(幌向地区自然再生)

担当課： 河川計画課

担当課長名：時岡 真治

※各事業において全ての項目に該当する場合には、費用対効果分析を実施しないことができる。

項 目	判 定	
	判断根拠	チェック欄
(ア) 前回評価時において実施した費用対効果分析の要因に変化が見られない場合		
事業目的		
・事業目的に変更がない	事業目的に変更がない	■
外的要因		
・事業を巡る社会経済情勢の変化がない	地元情勢等の変化がない。	■
内的要因＜費用便益分析関係＞		
1. 費用便益分析マニュアルの変更がない	B/C 算定方法に変更がない。	■
2. 需要量等の変更がない	需要量等の減少が10%以内	■
3. 事業費の変化	【事業費の増加が10%以内】 事業費の変化がない	■
4. 事業展開の変化	事業期間に変化がない	■
(イ) 費用対効果分析を実施することが効率的でないと判断できる場合		
・事業規模に比して費用対効果分析に要する費用が大きい または、前回評価時の感度分析における下位ケース値が基準値を上回っている。	■ 前回評価時の感度分析における下位ケース値が基準値を上回っている 前回評価時：45.4 ≥ 基準値(1.0)	■
前回評価で費用対効果分析を実施している	前回実施平成30年度：B/C = 50.4	■
以上より、費用対効果分析を実施しないものとする。		

美瑛川地区かわまちづくり：《水辺整備》

事業目的に変更が無いなどの費用対効果分析判定の結果から、令和4年度は、費用対効果分析を実施しないものとしました。

費用対効果分析実施判定票

年 度： 令和4年度

事 業 名： 石狩川総合水系環境整備事業(美瑛川地区かわまちづくり)

担当課： 河川計画課

担当課長名：時岡 真治

※各事業において全ての項目に該当する場合には、費用対効果分析を実施しないことができる。

項 目		判 定	
		判断根拠	チェック欄
(ア) 前回評価時において実施した費用対効果分析の要因に変化が見られない場合			
事業目的			
	・事業目的に変更がない	事業目的に変更がない	■
外的要因			
	・事業を巡る社会経済情勢の変化がない	地元情勢等の変化がない。	■
内的要因＜費用便益分析関係＞			
	1. 費用便益分析マニュアルの変更がない	B/C 算定方法に変更がない。	■
	2. 需要量等の変更がない	需要量等の減少が10%以内	■
	3. 事業費の変化	【事業費の増加が10%以内】 事業費の変化がない	■
	4. 事業展開の変化	事業期間に変化がない	■
(イ) 費用対効果分析を実施することが効率的でないと判断できる場合			
	・事業規模に比して費用対効果分析に要する費用が大きい または、前回評価時の感度分析における下位ケース値が基準値を上回っている。	■ 前回評価時の感度分析における下位ケース値が基準値を上回っている 前回評価時：43.9 ≧ 基準値(1.0)	■
前回評価で費用対効果分析を実施している		前回実施平成30年度：B/C = 48.8	■
以上より、費用対効果分析を実施しないものとする。			

石狩川総合水系環境整備事業の各地区の費用対効果は、効果が費用を上回っています。

◆水系全体の全体事業

	箇所 ※は整備済み	着手年度	完了年度	事業区分	総費用、総便益（現在価値化後）		B／C	備考
					B（億円）	C（億円）		
1	江別市かわまちづくり	R5	R14	水辺整備	110	5	20.5	令和4年度基準
2	砂川地区かわまちづくり	H31	R10	水辺整備	100	6	17.6	平成30年度基準※1
3	恵庭かわまちづくり	H31	R10	水辺整備	116	5	24.8	
4	石狩川下流自然再生（幌向地区）	H27	R6	自然再生	162	4	44.9	
5	美瑛川地区かわまちづくり※	H27	R1	水辺整備	239	5	48.8	
6	石狩川下流自然再生（当別地区）※	H13	H28	自然再生	1,100	25	43.2	平成29年度基準※1
7	旭川市街地区かわまちづくり※	H13	H27	水辺整備	216	61	3.6	
8	茨戸川水環境整備（茨戸川清流ルネッサンスⅡ事業）※	S53	H25	水環境整備	1,121	670	1.7	
9	豊平川水辺整備※	S42	H17	水辺整備	928	397	2.3	平成22年度基準※1
10	漁川水辺整備※	H15	H19	水辺整備	7	6	1.2	
11	雨竜川水辺の楽校※	H17	H19	水辺整備	2	2	1.1	
12	漁川ダム貯水池水質保全※	H13	H17	水環境整備	152	29	5.2	
石狩川総合水系環境整備事業					5,658	1,788	3.2	令和4年度基準

純現在価値（B-C）=3,871億円 経済的内部収益率（EIRR）=9.4%

※1 基準年が過去の事業については、基準年を本年度に設定した上で石狩川総合水系環境整備事業の費用対効果を算出しています。

●感度分析

全体事業	基本	残事業費		残工期		資産	
		-10%	+10%	-10%	+10%	-10%	+10%
費用対効果（B/C）	3.2	3.2	3.2	3.2	3.2	2.8	3.5

◆水系全体の残事業

	箇所	着手年度	完了年度	事業区分	総費用、総便益（現在価値化後）		B／C	備考
					B（億円）	C（億円）		
1	江別市かわまちづくり	R5	R14	水辺整備	110	5	20.5	令和4年度基準
2	砂川地区かわまちづくり	H31	R10	水辺整備	100	6	17.6	平成30年度基準※1
3	恵庭かわまちづくり	H31	R10	水辺整備	116	5	24.8	
4	石狩川下流自然再生（幌向地区）	H27	R6	自然再生	81	2	50.4	
石狩川総合水系環境整備事業					177	9	18.8	令和4年度基準

純現在価値(B-C) =167億円 経済的内部収益率(EIRR) =44.3%

※1 基準年が過去の事業については、基準年を本年度に設定した上で石狩川総合水系環境整備事業の費用対効果を算出しています。

●感度分析

全体事業	基本	残事業費		残工期		資産	
		-10%	+10%	-10%	+10%	-10%	+10%
費用対効果 (B/C)	18.8	20.7	17.2	19.2	18.2	16.9	20.6

8. コスト縮減や代替案立案等の可能性

新規箇所

再評価

8.1 代替案の可能性の検討

江別市、砂川地区、恵庭かわまちづくり：《水辺整備》

かわまちづくりの実施計画は、地元関係者、行政関係者などにより、議論を重ねており、現計画が最適です。

幌向地区自然再生：《自然再生》

整備内容については、計画段階から地域活動団体、有識者、国及び関係機関からなる「石狩川下流幌向地区ワークショップ」において議論を重ねており、現計画が最適です。

美瑛川地区かわまちづくり：《水辺整備》

整備内容については、地元関係者、有識者、行政関係者などからなる「美瑛川地区かわまちづくりWG」において議論を重ねた上で定めており、現計画が最適です。

8. 2 コスト縮減の方策

江別市かわまちづくり：《水辺整備》

側帯整備に他事業で発生した掘削土を活用し、約4百万のコスト縮減を図ります。

砂川地区かわまちづくり：《水辺整備》

管理用道路造成に他事業で発生したボックスカルバートを活用し、約14百万のコスト縮減を図りました。

恵庭かわまちづくり：《水辺整備》

管理用道路造成に隣接する恵庭市による公園整備により発生した土砂を活用し、約32百万円のコスト縮減を図ります。

幌向地区自然再生：《自然再生》

植生移植を地元住民やNPOと連携して行うことで約18百万円のコスト縮減を図りました。また、管理用道路整備においてコスト縮減を図ります。

美瑛川地区かわまちづくり：《水辺整備》

管理用通路の盛土に他事業の河道掘削により発生した土砂を流用し、約5百万円の縮減を行いました。

9. 地方公共団体等の意見

新規箇所

再評価

◆北海道の意見

江別市と連携して千歳川の水辺整備を行い、賑わいを創出する地域活性化の取組みなどは、北海道の川づくりビジョンの趣旨に沿っていることから、当該事業の継続について異議はありません。

なお、事業の実施にあたっては、徹底したコスト縮減を図るとともに、これまで以上に効率的・効果的な執行に努め、早期完成を図るようお願いいたします。

事業再評価については、社会情勢の急激な変化等により再評価の必要が生じたため、以下の3つの視点で再評価を行いました。

①事業の必要性等に関する視点

・江別市かわまちづくりは、地域のまちづくりと一体となった河川整備や利活用の推進により、地域活性化を図る必要があります。

②事業進捗の見込みの視点

・江別市かわまちづくりは、地元自治体、地域活動団体、地域住民などと連携し、整備を進めていきます。

③コスト縮減や代替案立案等の可能性の視点

・他事業で発生した土砂等の流用によりコスト縮減に努めていきます。
・また、代替案の可能性については、計画立案段階から、有識者や関係機関等からなる協議会等において議論を重ねており、現計画が最適であると考えます。

江別市かわまちづくりを加え、砂川地区かわまちづくり、恵庭かわまちづくり、幌向地区自然再生、美瑛川地区かわまちづくりを含む石狩川総合水系環境整備事業の必要性、重要性に変化はありません。

以上より、事業の必要性・重要性に変化はなく、費用対効果等の投資効果も確保されていることから、事業の継続を原案としてお諮りいたします。